学園黙示録　転生と気と無限と時々バイオ

ミズヒジキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園黙示録　転生と気と無限と時々バイオ

【Ｎコード】
Ｎ５５８２Ｕ

【作者名】
ミズヒジキ

【あらすじ】
かつてバイオハザードの世界を2日間のみ生きた転生者が、今度は学園黙示録の世界にチートな力を持って転生することになったが、その世界には自分以外のイレギュラーが存在していた……。

※この作品は、気という不可思議現象が存在します。銃弾が無限となります。『奴等』以外も存在します。
※この作品は、オリジナル主人公が大体の場面で無双します。つまり最強です。そしてところどころ変態です。

※作者は日本刀にロマンを感じています。つまり日本刀無双です。

などといったことがありますので、お嫌な方は見ないほうがいいかも。ＯＫな方はつまらないものですがどうぞお楽しみください。

第1話（前書き）

ほかの作品はどうしたんだとか言われそうなミズヒジキです。

これ、実はちょうどアニメをやっていた時期に別の掲示板に書いたのを再構築したものなんです。……もっともこの一話しか書いてない上、その掲示板も無くなったけど。

って、久々にこの文章が入ったデータを見つけたので、どうせなら続きを書いてみようかなと思い、投稿してみました。ですので、更新は細々です。

それでもよろしければ、どうぞ。

第1話

「本当に残るのか……？」

とある街。あたりが暗闇に覆われた時間帯のある高層ビルの屋上。ヘリのプロペラ音が響く中、今までともに行動していた男が俺に問いかけてくる。

「しょうがないだろ？噛まれちまったんだから。残る以外ないだろ？」

「でもよ……」

「落ち込むなよ。これが人生ってもんだろうが。……それじゃあな。楽しく生きろよ？」

「……ああ。ありがとうな。楽しく生きてくよ。……またな」

拳をぶつけ合い、最期の別れの挨拶をし、男はヘリに乗り込んで飛び去っていく。俺はそれを静かに眺める。が、後ろからガサッと足音が聞こえたので振り返る。

そこには、生気のない目、剥き出しになった鋭い歯、生々しい食いちぎられた痕があちこちにある、人間の姿を存在がいた。見ると遠くにもこれと同じような存在が大量に歩み寄ってくるのが見える。

「ったくよ。せっかくしんみりとした場面だったのにさ……、空気読もうね、『ゾンビ』さんよぉ？」

愚痴りながらも腰に備えていたハンドガンと右手で持ち、左手にサバイバルナイフをもって奴等――ゾンビ――に向ける。

「それじゃあ、俺の最期をとくとご覧あれ！」

――――これから後、街に一発の核ミサイルが発射され、地図から街が消滅した……。

◇

「よお、お前か。久しぶり（？）だな！！」

ガタイの良いスキンヘッドのスーツを着たおっさんが元気よく声をかけてくる。さっきまでのゾンビたちと戦っていた屋上でじゃなく、どこかの役所の相談用の部屋みたいな場所で俺とおっさんは向かい合って座っている。

「……おい、なんで俺はまたここにいるんだよ？まさか、また『転生』して2日で命散らせと？」

『私、不機嫌です』というオーラをだしながら尋ねる。……言っておくは別に俺は頭がおかしくなったわけじゃないぞ？

今俺がいる場所は、簡単に言ってしまえば死後の世界ともいうべき場所だ。正式名称は『全界』って言うんだけどな。

とにかく死んだ人間の魂はこの全界に来る。そんでいろいろと処遇が決まることになっていて、その中の一つに『転生』という選択肢があるのだ。もっとも、自分でどういったことを選択するとかできないけどな。

っで、実は俺は一度『転生』をしているのだ。転生先は全界除いたあらゆる世界だが、基本的には漫画や映画、ゲームをモチーフにした『空想界』に行くことが多く、俺も例外なく空想界に転生することになった。ちなみに俺は元日本人で漫画ゲームはある程度知っているぐらいだ。

そんなこんなで俺は転生することになったんだが……、よりによって転生先が『バイオ・ハザード』だった。しかも絶賛ゾンビ徘徊中のラクーン・シティ。……世の理不尽さを呪ったよ。見た目はレオン並のイケメンアメリカ人だったのは嬉しかったけどさ。

まあそこは転生前にもらえる能力、俺は身体能力強化とか射撃の腕とか貰った――現実っぽい世界で魔法は頼むのは引けるしね――能力でなんとか迫り来るゾンビとかリッカーとかハンターとか駆逐していったんだけどね。……タイラントに襲われたときはあせったけど。

その際、脱出の途中で知り合った男にあるビルの屋上にヘリがあるという情報を聞き、急いでそのビルまで男と共に向かい――男とは

途中で意気投合した――、順調に進んでいるなと思ったら最後の最後で噛まれてしまったのだ。っで、脱出をあきらめてラクーン・シティに残りゾンビを狩りまくって、核の飲み込まれて人生を終えたのだ。

せっかく転生したのに、わずか2日間しか過ごせなかったんだぜ？ちょっとひどすぎない？愚痴ってもしょうがない気もしないことはないが。

「まあまあそう怒るなよ？確かに前はひどすぎたが、今度はちゃんと人生を楽しませてやるからよ？」

俺の怒気をさらりと受け流し、ハハハとおっさん、確か転生仕事人番号６６６番だっけか？は笑う。ちなみに前もこのおっさんが担当だった。……前も思ったがなんて番号だよ？

……とりあえず、この感じじゃあ転生は確実なのね。できれば次はもう少しマシな世界で生きたいよ。

「そうかい。っで？今度はどこの世界に転生することになるんだ？」

「今度はな、『学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ』って作品をモチーフにした世界だ！」

「・・・・・・。ハッ？」

ちょっと待て？今何つった？『学園黙示録』って俺の記憶が正しければ……？

「またゾンビ系かよ！？しかも前より救いねえじゃねえか！？」

あの作品、映画版のバイオハザード3みたく世界中にゾンビもどきみたいなのがうようよと現れるはずだろう！？バイオのリッカーとかタイラントみたいなのがいないのはいいけど、それでも面倒極まりない世界じゃないか！？これはあれか、俺をいじめてんのか！？

「変えろ！今すぐ別の世界にしてくれ！！希望はほのぼの日常コメディ系で！！」

「無理だ！！」

あっさり否定ですかチクショウ！！

「一度決まったら世界は変えられないからな、悪いな兄ちゃん。……それじゃあ能力を授けるから」

そういって、こっちに白い封筒を渡してくる。デカデカと『能力と特典』と書かれている。おっさんはジェスチャーで破くように指示し、それに従い口を破いて中をのぞいて見る。中にはカードが3枚ほど入っていた。

……というかさ、これはなんさのさ？能力って確か自分で選ぶはずじゃ…？

「あのさ、前は俺が好きに能力決めてたよね？なんで今回はそうじゃないの？」

「ああ、実はあんまりにも無茶な注文をする輩が多くてな、それに上の役職の方が切れて、しばらくの間はこっちで勝手に能力を決めるようになったんだよ」

……なんてこったい。よりにもよってそんな時期に…、うらむぞ転

生者諸君。

「そっちの事情は分かったよ。とにかく、このカードに俺がもらえる能力が書かれているんだな」

「そういうこった」

できればいい能力ならいいんだけどな……。そう思いながらカードを引き抜き、書かれているであろう内容を見てみる。さて、なんて書いてあるか……。

・身体能力を人間の限界まで上げる及び未来予知。
・気の力。
・無限弾ツール×2（ある時期になるまでは譲渡せず）

……あの世界においてはずいぶんとチートな能力だな。っていうか……。

「未来予知に気の力ってなんだよ？」

明らかに二つ、世界観にそぐわないのがあるぞ。無限弾ツールも十分おかしいけどさ。

「未来予知は実際に未来を見るわけでなく、少し先に起こりうる危険を知らせてくれるようなものだ。気の力は主に身体能力の強化と武器の強度を上げることができるくらいだ」

そりゃまたとんでもない。危険回避をしやすくなるし、ただでさえ

高い身体能力を底上げでき、武器も強化できるから長持ちしやすくなる。……負ける気がしないな。

「しっかし、結構無茶な能力だけど……、大丈夫なのか？」

「このぐらいは許容範囲なんだとさ。正直どういう基準で選んでんだが」

まったくだ。

「……さてと、これで転生準備は完了だ。それじゃあ後ろのドアを開ければ人生スタートだぜ？頑張ってこいよ」

いつの間にか存在していた扉に目線をやりながら、いい笑顔でサムズアップする。

「あいよ。それでは我が人生の第3幕をこうご期待ください」

演劇のようなセリフをはきながら、俺は扉を開けて中に入っていくと意識が朦朧とし始める。まあこれは前も経験したから驚かないけど。せめてゾンビもどきが出るまでは普通に過ごしたいね……。

この時俺は、これから行く世界であいつらと再び合間見えることになるとは、夢にも思わなかった……。

第1話（後書き）

最初の文はバイオ世界での会話です。分かりづらかったらすみません。

この転生者がいることで、人間関係の変化や死ぬはずの人間が死ななかったりが起きますので、これからさき読む場合は気をつけてください。

では。

第2話（前書き）

簡単な説明と原作へ突入直前までです。前半にセクハラ発言ありますので、気分を悪くなるかたは飛ばしてもかまいません？

第2話

日本は床主市（とこのす）に存在する、全寮制私立高校藤美学園。俺が通う学校であり、『原作』が始まる場所である。

この世界に転生して早17年。藤美学園に入学して現在2年目の春を迎えている。っで、今俺が何をしているかというと……。

「鞠川先生〜〜、いい加減俺とや・ら・な・い・か？」

「ええっ！？」

「あんた何セクハラ発言してんだよ！？」

ボイン（死語）な保険医鞠川先生のいらっしゃる保健室のベッドで先生にお誘いしている最中だ。ちなみにツッコミを入れたのは俺と同じ保険委員の石井和（いしいかず）だ。よく委員の仕事で行動することが多く、今では俺のボケにツッコミを入れてくれる存在だ。

……えっ？前の話と性格違わないかって？いや何を。これが素ですから。

「なんだよ石川君。君は鞠川先生を見てなんとも思わないのか？俺はいつかあの胸に顔を埋めるのが夢なんだぞ？」

「そんなおっさん臭い夢よりもっとマシな夢を持てよ！あと石井だ！」

うんうん、俺のボケをちゃんとツッコんでくれる。打てば響くから

本当にいい奴だよこいつは。……胸云々は事実だけどね。

「ア、アハハハ……。二人とも、もうそろそろ時間だから上がっていいわよ」

「あ、ハイ分かりました」

「いや～～、今日も実に疲れたな～～」

「仕事大してしてなかったじゃないか……」

「鞠川先生を視姦して裸を妄想してハアハアしてただろうが」

「それは仕事じゃなくて犯罪だからな！！」

「冗談に決まってるだろうが……。なら最後の大仕事にお別れのベロチュ～を――――」

「お前はいい加減にしろ！！」

怒られました。

◇

「石田ってさ、ちょっと俺に厳しいと思うんだよな。どう思う、我が弟よ？」

「兄貴が悪いと思うよ。それと石井」

学園にある寮の自室にて、俺は同室である我が弟に今日の事を報告すると、飽きられ顔でこう返された。

「ちょ、ひどくないか孝よ。俺はお前の尊敬する恭介お兄さんさんよ？」

「兄貴が尊敬できる所って、運動神経が化け物並なのと、『気』なんて馬鹿げたもの使えることだけだろ？」

「はっきりいうなあ。てか、『気』ならお前だって使えるだろ？」

「ベテランの兄貴ほどじゃないけどな」

そういって肩をすくめる孝。まったく、どうしてこんな子になっちゃったんだか……。

そうそう、俺は主人公である小室孝の双子の兄の小室恭介として生を受けた。……どう考えても原作介入しろって言ってるようなもんだぞ？容姿は孝の身長を１８０ｃｍにして髪を背中に届くくらいのロングヘアにしているのを想像してね。

っで、そうなると必然的に他の原作キャラと関わりを持つことになるわけよ。ただ、本来いない存在である俺のせいなのか、人間関係などが微妙に変わっている。

例えば、孝が宮本麗に特別な感情を抱いてなかったり、友達の井豪永と一緒になって俺と戦ったり、石井と仲が良かったりｅｔｃｅｔｃ……。まあこれぐらいなら別にいいかなって思う。

授かった能力もなんの問題もなく働いている。身体能力に関しては３階から飛び降りても平気だったり１００ｍ５秒で走れたり等等だ。おかげで部活勧誘が凄いのだが、ある意味ズルをしているようなものなので丁寧に断っている。真剣にやってる人に悪いし。

未来予知は説明された通り危険を予知させてくれる。ただし具体的にどういった危険かが分かるわけでなくその危険も数分先から一週間先までと様々なのでよく考えないといけないし、そもそも教えかたら頭に一瞬ビジョンが見えるだけなので、本当に分かりづらい。……まあ何回か危機を回避しているので役立たずってわけでもない。

そして、この世界にもっともそぐわない、『気』の力。これを自身の肉体強化に使うと１００ｍを３秒で走れたり、ダンベル２００ｋｇを片手で上げたり、さらには防御力が増すのでバット程度で殴られても傷一つ付かないのだ！……うん、化け物かよ。
また、『気』を物に纏わせればその物の強度が増す。頑丈さ、切れ味、鋭さｅｔｃ……。とにかく全部が上がるので、『奴ら』との戦闘において武器が折れたりとかが減るだろうと思う。もっとも、『気』は体力を使うので長時間の使用はできない。最長でも１日が限度だ。

まあ、これが俺という男のスペックなんだが……、先ほどの孝の発言から、お気づきの方もいらっしゃるでしょう。双子として生まれたせいか、俺のスペックの一部を受け継いでしまったのだ。

もちろん俺ほどではないものの、それでもちょっと格闘技かじった程度の奴なら簡単に倒せてしまう身体能力を持ち、さらに『気』も

使えてしまうのでさらに強くなることができる。……主人公を意図しなくても魔改造してしまったのだ。
『気』が使えると発覚したのはつい最近のことなので、俺は突然変異だと説明しつつも、『気』の使い方とそれに伴う注意――むやみに人に使うと大怪我させてしまうとかいろいろ――を教えた。
ちなみに現在『気』のことを知っているのは俺と孝と永と麗のみだ。こいつらは他の人間に話さないだろうと信頼できるからだ。こんな力、むやみに知られればどういわれるか分からないからな。
……正直、これが原作を大きく変えてしまうのではと思うものの、少なくとも良い方向にもって行く要因になってほしいと願う。

さて、そろそろ話を会話に戻していきますか。

「ところで話は変わるんだが、麗ちゃんが留年したことに紫藤が関わってるって噂を聞いたんだが、なんか知らないか？」

そんな噂は無いけどね。原作知識があるゆえに聞いてみる。

「紫藤先生が？そういった話は聞いてないけど……、でも先生が麗の留年に関わってるって……、成績操作でもしたってことか？でもなんで……」

「さあ？あくまで噂だからどうとも言えないな。ただ、紫藤の親父はなんかの議員をしてたはずだから、ひょっとするとそれが原因かもよ」

「……まさか汚職とかそういったことで麗のお父さんが調査してい

て、それを良く思わなかった紫藤先生が麗を……？」

「まあ所詮は予測でしかないからどうともいえないけどね」

険しい顔をし始めた孝になだめるように言う。……まあ孝に紫藤に悪感情を持たせるためにやった俺がなだめるなんてあれだけど。あの宗教眼鏡と一緒にいるのは正直ヘドがでるしね。

……いっそ学園にいる間に殺しちゃおうかな？……なんてね。

◇

それからしばらく経ったある日。本来授業中の時間であるにも関わらず俺は屋上で寝転がっていた。つまりサボっているわけだ。そもそも頭は大して良くないので授業にでても分からないのだが……。

「あれ、兄貴もいたのか？」

すると良く知る声が聞こえたので頭を向けると、予想通りに孝がいた。

「よう青少年。授業をサボるなぞ関心せんな」

「昨日あんまり寝れなかったんだよ……。それより、なんでバットと木刀がそこにあるんだ？」

お前なにがしたいんだよと言いたげな顔をしながら俺の隣に置いてあるバットと木刀を指差す。どちらも俺の私物ね。もっと細かいこと言えばコレだけじゃないんだけどね。主に俺の腰に潜んでいる物とか

「いや、ちょっと変なヴィジョンが頭をよぎったからさ。それで護身用にでもと」

「そっか。じゃあバットでいいから僕に貸してくれる？兄貴のそういうのは良くないことの前触れだからな」

「ああいいぜぇ」

……なにせ、バットはお前用に用意したんだからな。今日頭によぎったヴィジョンが正しければ近いうちに……。

「ん？なんだあれ？」

その時、柵にもたれかかっていた孝が、何かを見つけたようだ。

「どうした？」

「いや、校門のところに誰かがいるんだよ。で、今先生たちが駆けつけて……」

――――ギャアアアアアア……！！！！！

「……ついに来たか！」

狂った世界の幕が開かれる……ってか。

第2話（後書き）

原作主人公の小室孝はどんどん改造されていくのさ！！フハハハハ！！！……すみません調子乗りました。

ここで転生オリ主の簡単な概要を。

名前：小室恭介

身長：１８０ｃｍ

体重：６１ｋｇ

容姿：小室孝の髪を背中まで伸びるロングヘアにした感じ。後は孝とそっくり。髪を長くしたのは、孝と間違われないため。

細かな説明は今度にでもします。

それでは、また。

第3話（前書き）

一応原作で言えば1話中盤当たりまでです。
ギャグが最初入りますので、シリアスがほしいひとはとばしてかまいません。

それではどうぞ。

第3話

「ちくしょう！なんなんだよさっきの！？」

学園の廊下や階段を走りながらバットを片手に持った孝は信じられないといった顔で叫ぶ。

「少なくとも、とんでもないことがおきてるってのは確かだな。……とにかく急ぐぞ」

それをなだめながら木刀を持った右手を握り締める。

叫び声を聞いて校門の方を見ると、不審者と思わしき男に腕を食いちぎられた教師がうめき声をあげ、動かなくなったかと思うと突如女性の教師の首に噛み付いたのだ。

突然の猟奇的な光景に呆然とする孝だが、俺は『あれ』が何かを知っているのと前世のバイオ世界での経験のおかげかそれを普通にみることができた。……普通に見れることに対して嫌悪を覚えたのはこの際どうだっていい。

とにかく、本能的にやばいと感じたのか、孝はバットを拾い上げたと思うとすぐに校舎の中に走り出していった。さすがは主人公というべきかね、なんて思った俺は普通だと思う。

っで、俺たちは現在、在籍クラスの２－Ｂに向かって永と麗の二人を連れ出すために走っているわけだ。

「なあ、あの教師、なんで突然あんなことしたんだ？」

「……あの男に噛まれる前は普通だったから、おそらくはあの男が原因なんだろう。……もし、あれと同じようなのにあったら注意しろよ？」

俺の忠告に孝は静かにうなずく。そうこうしているうちにどうやら２－Ｂまでたどり着いたようだ。俺は勢いよく教室のドアを開け……。

「麗ちゃん俺だ～～。結婚してくれ～～」

ズガンッ！！

孝がスライディングしながらずっこけた！！

麗が頭をすばらしい速度で机に叩き付けた！！

永が椅子から転げ落ちた！！

何故か天才の高木沙耶（たかぎさや）も頭を机にぶつけていた！！

銃マニアの平野コータは苦笑いしている！！

教室のみんながクスクス笑い始めた！！

教師が怒鳴り始めた！！

俺はレベルが２アップした！……なんて。

「こんなときになにふざけてるんだよ！？」

孝くんが人殺しの目つきで怒鳴ってきます。正直怖いです。いやん。

「いや～、つい」

「つい、ってそういうこと言わないでくださいよ恭介さん！！いきなりなんなんですか！？」

「え～～、そんなに嫌？あれよ、俺と結婚したら小室麗よ？白い悪魔なニュータイプに似た名前になるのよ？ひょっとするとあなたは新人類？なんて」

「別にそういうのどうでもいいですから！！」

せっかくの求婚を麗ちゃんは受け取ってくれないみたいだ。……そんなにニュータイプになるの嫌なの？俺との子ならある意味ニュータイプもどきになるかもよ？

「そ、それより、どうしたんですか恭介さん、木刀なんて持って。孝も血相変えてバット持ってるし……」

そこへ永が苦笑いしながらも俺たちの持っている得物について聞いてきた。クラスもそれをみて一体なんなんだと騒がしくなる。

「ああ、それなんだが……」

「訳は後で話すから、黙ってついて来い」

訳を話そうとしている孝を遮って、二人の手をつかみさっさと教室の外に連れ出す。二人は突然のことに抗議しようとするが、そこは

元々のスペックの違いと『気』の力を駆使し、無理やり引きずり出す。教師がなんか騒いでいるが非常事態ゆえに見逃せ。

◇

「教師同士が殺しあってるって……、どういうことだよそれ？」

廊下を４人で走りながら校門で起こったことを二人に話す。まあいきなり殺し合いだとか言われて訝しげな表情で見てくるのは間違ってないと思う。さっきの教室での俺の態度がそれを助長しているかもしれないけど。

「分からない。とにかくヤバイってことしか……。それに、兄貴もこれを予知したようだし」

そう言ってちらりとこっちを見てくる孝。それにあわせ二人も俺を見て「本当？」と目線で伝えてくる。

「……俺が見たのは、人が人を食らうなんていう、ふざけた映像だよ」

実際に見たのは校門での光景なのだが、あえてどこでのものかは伝えずにそれだけを言う。俺の中途半端な予知はこれでも信頼はあるらしいからな。

「人が人をって……！そんなの、まるで映画の話じゃないですか！？」

「そりゃふざけたもんだけどさ……、校門の光景見ちまったからそうとも言えないんだよな」

本当は『原作』の知識でもあるんだけどね。さすがにそんなことは言えない。

まあ、そんなことよりも、いいかげん二人に武器でも渡しておかないとね。……そこら辺に置いてあるものを勝手に拝借するだけなんだけど。

辺りを見回すと、ロッカーと棚があり、棚の上にはバットが入った鞄がある。うん、ここは原作通り。それらに近づいてロッカーをあけて掃除道具の棒を取りそれを麗に渡し、バットを永に渡す。

「ほれ。とにかくこれ持っておけ、必要になるから」

「あ、はい。分かりました」

「俺は空手の有段者だから別に武器が無くても……」

「ハイそれ死亡フラグだから」

さっきの話を聞いてたのかこいつ？人が人を食らう。つまり近づいたらヤバイってことだ。なのに素手で挑むなど殺してくださいって言ってるようなもんだぞ？

「俺、この戦いが終わったら結婚するんだ」とか、「俺にかまわず先に行け！」とか「スペシャルで模擬戦で２０００回なんだよぉ！！」とか言ってるようなんもんだぞ？……いや最後の奴は不死身だし幸せになりやがったけど……。

―――全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！

……おいおい、この放送ってまさか……？

―――繰り返します！現在校内で暴力事件が発生ちゅ……（ブツッ……ガキィン！）……ギャアアアアッ！！！助けてくれ、やめてくれ！助け……ア、グアアアアア！！！

放送を通して聞こえてくる苦悶の叫びが学校中に響き渡り、それにより数秒の静粛が学園を包む。だが、次の瞬間にはあちこちから逃げ惑う声が学園を覆う。

それを聞いた俺と孝と永はお互いの顔を見やる。そして今まで走っていた方向とは違う方向に走る。

「えっ…！？外に逃げるんじゃなかったの！？」

「教室棟は人で溢れ返ってる！！管理棟から逃げる！！」

そう言って管理棟の方に向かっていくと、前から誰かが現れる。あの感じは確か……。

「あれって現国の脇坂？」

「まさか邪魔するつもりじゃ……ッ！」
完全に姿が見えるようになると、脇坂の目からは血が流れ、左足は一部が欠けているにもかかわらず、こちらに向かって迫ってくる。
……確か原作だとこいつのせいで永が……！！
「麗、避け……！？」
「怨むなよ脇坂！！」
孝が麗に叫ぶより早く、脇坂に近づいて『気』を纏って僅かに光る木刀を頭部めがけて振り下ろす。直撃した瞬間、頭がはじけとび脳漿や血が飛び散ってくるが、この程度バイオ世界でなれたのでまったく気にもならない。脇坂の体はそのままゆらゆらとゆれたあと、仰向けになって倒れる。
うし、これでひとまずは安心かな？
「あ、兄貴……？」
……っといけない。そういえばこいつらはまだ『奴ら』のこととか理解する前だったな。そんなおびえた顔で見られても困るんだが。
「……悪いな。いきなしこんな場面見せて」
「い、いや……。それよりも、なんでそんなことを……？」
まあ、そうなるわな。
「脇坂の様子見てたろ？どう考えても普通じゃなかった。となると、校門にいたのと同じかとおもってな」

「校門のって……。じゃあ脇坂もあいつらみたいなことを？」

「多分な。だから早めに潰したわけだ。映画だとこういう場合頭を狙えばいいのが多いからな」

そういや、ゾンビ系の奴って頭を食らうやつってあんまし見ないんだよな？なんでだ？……それは今はどうでもいいか。

一応、永が『奴ら』になる原因は潰せたが、原作の修正力が働くなんてこともあるから気をつけないとな。

……そういえば。

「……悪い3人とも。ちょっと寄り道してきてもいいか？」

俺の突然の言葉に3人がなぜといった表情をする。

「いや、石井の奴とか鞠川先生とか心配でさ。それで様子見に行きたいんだが……」

原作の2話で石井の奴は鞠川先生を庇って噛まれるはず。何の因果か知らないが、知り合いとしてほうっておけないし、ひょっとすると永が死なない代わりに鞠川先生が、なんてことも考えられる。

まあ、もうひとつ理由としては、保健室に無断で置いておいた『アレ』とか取りに行きたいんだけどね。……持ってたら怪しまれるだろうけど、武器は多いに越したこと無い。

「そっか…。じゃあ僕たちは先に行っとくから……、無茶すんなよ兄貴」

「当たり前田のクラッカー、は古すぎるけど、任せとけって。あと、

こういう奴らは力が強くなってるなんてこともあるかもしれないから、お前らも無茶すんなよ」

心配する3人に多少のギャグを言いながら、昔からよくやる拳のぶつけ合い――バイオ世界で知り合ったあいつの影響だ――をし、3人は管理棟へ向かった。俺はそれを見送ったあと、後ろから『奴ら』が近づいてくるのを察知し、『奴ら』に木刀を向ける。

しかし、こういう時に不謹慎なんだけど……、妙に気が高ぶるんだよな。目の前の『奴ら』を狩れると思うと。ひょっとして、俺って戦闘狂（バトルジャンキー）の類なのかもな。ま、それでもいいけど。

「さあって。それじゃあ俺の無双をとくとご覧あれ！！」

◇

［ｔａｋａｓｈｉ］

鞠川先生や石井の無事を確認しに行った兄貴に見送られた後、管理棟から外に出ようとした僕たちだったが、予想以上に『奴ら』の数が多く、屋上に上がって救助が来るまで立てこもるということになった。途中に『奴ら』が何体も襲い掛かってくるが、

「うおおおっ！！」

僕や永、麗が各々の武器を使って、兄貴に言っていたように『奴ら』

の頭を狙って潰していく。一度麗が棒を掴まれて危うく噛まれそうになったが、永が間一髪で助けたので今は誰も負傷していない。

「二人ともまだいけるか！？」

「何とか！」

「こっちもまだいけるぞ！」

僕の問いかけに二人とも元気に答える。さすがに空手有段者と槍術部だ。

「よしっ、この調子なら……っ！」

いける、そう思った僕たちの前には、３０はいるだろう『奴ら』が廊下に犇いていた。『奴ら』は僕たちの声に反応したのか、一斉にそのおどろおどろしい顔を向ける。

「くそっ！？屋上行くにはここしかないのに！？」

「どうするの！？今から外に行くのも……！？」

確かにこのまま戻ったところで、ここよりも多いだろう1階に行くのはどう考えても無理がある。

「……このままここを突破する」

「突破って、この数相手に！？」

僕の発言に麗が無茶だと叫ぶ。まあこう狭い廊下でこれだけの『奴

ら』がいれば普通はどうあがいても無理だろう。普通なら……な。

僕は意識を体に集中させ、体の内にあるエネルギーのようなものを全身に流すイメージをする。そうすると、体全体に力のようなものが流れ、僅かだが淡く光る黄色い何かが僕の体を包む。

『気』の力。僕と兄貴が使うことが出来る力だ。何故これが使えるかについてははっきりとは知らない。ただ兄貴は脳のリミッターが外れたとか、突然変異だとかそういうものだろうと言っていた。ちなみに体を包む光は、僕と兄貴にだけしか見えないらしい。

これを使うと、体が軽くなり、力もずっと上がる。はっきり言ってそこらへんの不良程度なら負けるとは思えないぐらいの力だ。もっとも、兄貴から簡単に人を殺せる力と言われているので、普段は使うことはめったに無い。

だけど……、今この状況を生き延びるためになら、使ってもいいよな？

「さあ、オレの力をとくとご覧あれ！」

兄貴がたまに使う言葉を真似て『奴ら』に突撃していく。それなりに距離があったにもかかわらず1秒もしないうちに目と鼻の距離まで近づき、頭に一撃食らわせる。それにより脇坂の時のように頭が炸裂し中のものが飛び散るがそれに構わず次々と『奴ら』を倒していく。

後ろから襲い掛かってくるやつ、横から呼びかかってくるやつ、3体ほどで襲い掛かるやつなどいたが、強化されたオレにはまったく意味が無く、返り討ちにしていく。

———楽しいなあ。

そう思ったときに周りをみると、すでにここにいたはずの『奴ら』は全滅していた。遠くから二人が来るところを見ると、どうも一人でやってしまったらしい。

「ったく……。相変わらずめちゃくちゃだな。『気』ってやつは」

「でも、これで屋上いけるね！！」

永は呆れながらも、麗と一緒にうれしそうに笑っていた。それにつられてオレも笑う。それから僕たちは屋上へと向かった。

……ただ、何故あの時楽しいなどと思ったのか、それが分からなかった……。

第3話（後書き）

……別に孝を戦闘狂とか中二とかそういうのにするつもりはなかったのに、話をかいたらこうなった。……いつか邪気眼とかにならないよう、ひたすら願う。

ちなみに作者はガンダム知識はある程度しかなかったりする。

それではまた。

第４話（前書き）

今回は原作第２話の中盤？あたりまでです。
作者の中では、原作キャラたちは切り替えが早いと思っています。
ではどうぞ。

第4話

廊下をうごめいている『奴ら』の頭に確実に木刀を打ち込みながら保健室に向かう。途中まだ噛まれていない生徒たちもいたが、それにかまうことなく突っ走る。そうしていつも見慣れた保健室のドアが視界に入る。どうやらたどり着いたようだ。

「鞠川先生いますか！？」

「ん？あっ、恭介くんおはよ～～」

……こんな状況でなにを間延びした挨拶をしてらっしゃるのか。

「！？恭介、お前やっぱり無事だったか！？」

その近くには石井が点滴スタンドを持って立っていた。ベッドには生徒が一人苦しそうに寝ている。

「ようお二人さん、元気ですか？……で、石井、そいつは？」

「同じクラスの岡田なんだが、あいつらに噛まれて、それでここまで運んできたんだ……」

噛まれた……か…。

「そっか……、それじゃあもう長くないな」

俺はその岡田という生徒の近くまで移動し、木刀をその頭に近づける。光を失いかけているその目には僅かに恐怖が見える。

「お、おい恭介！？お前何する気だよ！？」

「……岡田だっけか？しゃべれないなら頷くだけでもいい。このままだとお前は『奴ら』になる。今なら人間として死ねるが……、どうする？」

あえて石井を無視して聞こえているかどうか分からない生徒に問いかける。声に反応してか顔をこちらに僅かに動かす。

「ちょ、ちょっとまてよ！まだそうと決まったわけじゃないだろ！？助かるかもしれな―――」

「現実を見ろ。アレに噛まれた人間はみんな同じモノになってるんだ。ならこいつもいずれはそうなる。それとも、お前は『奴ら』になったこいつを自分の手で殺すか？」

石井が俺の言葉に反論するが、助かる可能性なんて期待できない。『奴ら』に噛まれた人間は必ず同様の存在になるのは確実だろうし、ワクチンなんて都合の良い物がこの世界に今この場所に無い以上、今のうちに殺したほうがいい。それに、さすがに友達を殺させるのはひけるしね。

「……お、おね……、おねが……しま……」

「岡田……！？」

耳を澄まさなければ聞こえないぐらい小さな声で、俺のほうを見ながら答える岡田。その目には死ぬことへの恐怖なのかどうか分からないが涙が流れている。

「……了承した。二人とも、目を瞑っとけ。見て気持ち良いものじゃないからな」

木刀を上段に構えながら二人に言う。鞠川先生はコクコクと頷いて後ろに振り返り、石井も拳を握り締めながら目を瞑る。

それを確認してから、確実に逝けるように気を纏わせた一撃を頭部へと振り下ろす。

……当たる直前、岡田の顔は幸せそうな顔だったように見えた気がした……。

◇

「さて、悪いんだが二人とも、急いで脱出の準備をするぞ」

あれから岡田の体を布で包み、時間をおいてから顔色を悪くした二人に声をかける。……やっぱりこういうのに慣れていない人間にはきついかな。どうせこれから嫌でもなれる必要があるけど。

「……脱出って、一体どこにだよ？どっか当てでもあるのか？」

椅子に座って項垂れていた石井が目の端を濡らしながらもたずねて来る。

「今は無い。だけどこんな学園にいるよりはマシだろ？」

『奴ら』の数が多く、食料品も手に入れるのは簡単じゃないだろう学園に立て篭もるのはあまり得策じゃない。家族の無事を確認するためにも、学園から出る必要がある。明確な目的地は無いのは痛いかもしれないけどな。

「学園から出るの？それじゃあ必要な薬とか持ってけるだけ持つからちょっと待ってて」

俺の意見に賛成なのか、鞠川先生がリュックや鞄に薬を入れていく。石井も無言だがスッと立ち上がってドアのほうに立って外の警戒をし始める。

……と、そうだった。あんなことがあったから忘れるところだったけど、俺がここに来た目的のひとつは武器回収じゃないか。何事もなければベッドの裏に貼り付けてあったはず……。ベッドの下を確認して……、よし、ちゃんとあるな。

「……恭介、今度はなにやってるんだ？」

俺の行動に疑問を持った石井が訝しげな表情をしながら聞いてくる。

「なにって、ちょっと無断に置かせてもらってた武器を……よし、取れた」

ベッドの裏に『ソレ』を固定するために貼り付けていたガムテープを剥がして『ソレ』をじっくりと眺める。

「あ、あの～～、恭介くん？なんで保健室にそんなものが……？」

俺が取り出した物が予想外すぎたのか、元々のゆるい雰囲気ときょとんとした顔で、『ソレ』を指差す。

「いや先生そこは、念願の『日本刀』を手に入れた！！という場面ですけど？」

ちなみに『殺してでも奪い取る』とか選択したらぶっ殺すよ？

日本刀。つまりジャパニーズソードだ。黒一色の鞘から引き抜くと、反りのある７０ｃｍほどの刀身が現れる――その際に二人ともゲッといった顔で強張らせた――。
俺が小遣いやバイトで貯めに貯めまくった貯金を使い果たして裏ルートで買うことができたものだ。もっとも刀自体の出来は大したものではなく、人を２０人ぐらい斬れば使い物にならなくなるものだ。だからこそ無理して買えたんだけど。

「な、なんで日本刀なんかが保健室にあるんだよ！？」

「いやね～～、なんでだろう？ついつい冗談でおいたんだけど、まさか使う日が来るとは思わなかったわ」

嘘だけど。

「冗談でって……、そんな理由でそういうことするのか――――！？」
納得いかない石井が追求しようと声を荒げるが、それと同時に窓が割れて、『奴ら』が部屋の中に進入してきた。
「ま、まずい！？鞠川先生まだですか！？」
「ちょっと待って！これじゃ足りないわよ……！」
すぐに『奴ら』から離れて点滴スタンドを構える石井が鞠川先生をせかすが、まだ必要な薬があるのか焦りながら薬をいまだに詰めている。それでも『奴ら』は待ってくるわけでもなくジリジリと近づいてくる。
「……まあそれがどうしたってんだよ！！せっかくだから、試し切りさせてもらうぞ！？」
右手に日本刀、左手に木刀を持ってそれらに『気』を纏わせる。まだ切れ味のほどを試してなかったから二人を守るついでにちょうどいい！！
『気』を纏った日本刀を『奴ら』の一体に向けて縦に振るうと、一切の抵抗も無く体が真ん中から綺麗に二等分となる。……すげぇ。どうやらとんでもなく切れ味が上がるようだ。
なんて思っていると横から他の奴らが襲い掛かってくるが、そんなものに遅れをとることなどあるわけなく木刀を横薙ぎに振るえば、グシャリと嫌な音を立てながら吹き飛んで壁にぶつかり動かなくなる。

その調子で駆逐していけば、敵はあっさりと全滅した。……床に臓器を撒き散らして。……ちょっとやりすぎたな。二人とも口押さえてるし。

「こ、これは気にしたら駄目だぞ？お兄さんとの約束だ。……ほら、今のうちに脱出するぞ」

手で廊下に出るよう指示をし、木刀で臓器を端に寄せつつ道を作ってそこを歩く。二人もそれに従いまだ口を押さえながらもついてくる。

廊下から出る前に、『奴ら』がいないかを確認し、今は近くにいないと判断して廊下に出る。

「……ふぅ、戻さなくてよかった……。それより恭介くん、外に出るにしてもどうやって？歩き……じゃないわよね？」

「当たり前でしょ？出来れば車か何かで脱出するつもりですから」

『原作』では部活遠征用のバスを使っていたはずだから、今もまだあればそれを使えば無事に脱出できるはずだ。……少なくとも原作組は。イレギュラーの俺や本来死ぬはずの永と石井はやられる可能性も十分にあるからな。

「そういえば…、孝や宮本、それに井豪はどうしたんだ？」

「今は別行動中。多分あいつらも職員室に向かってるはずだ。だから大丈夫」

俺の予想が正しければ、おそらくはいったん屋上に行ったはずだ。そうなると永のやつなら救助が来ないことぐらいは分かるはず。そ

の後『原作』の通りなら平野が作った自家製クギ打ち銃の音に気づいて職員室にいくはずだ。多分。
ひょっとすると永のやつはすでに……、なんて最悪の予想も考えられるが、俺の力を受け継いじゃった孝や恋人の麗がいるんだから心配する必要は……んっ？

何かが空気を切る音とドサッという倒れる音が先にある曲がり角から聞こえてくる。誰か戦っているのか？慎重に廊下を進んで曲がり角までたどり着いて様子を見ると、黒い髪を腰まで伸ばした女子生徒が次々と木刀を『奴ら』に打ち込んでいた。……あれ？彼女、もしかしてあの作中最強と名高い毒島冴子（ぶすじまさえこ）じゃ……って、後ろから『奴ら』が！？

「あぶねえ！！」

声が響くとかそんなの関係なく、日本刀を襲い掛かろうとした『奴ら』の頭めがけて投げた。

◇

［ｓａｅｋｏ］

迫りくる化け物たちに木刀による一太刀を浴びせながら、私――毒島冴子――は化け物たちを倒していた。

ホラー映画のように死んだ人間が生者を襲うなどというありえない現実であるにも関わらず、私は恐怖より先に興奮していた。

――――かつて夜道で襲ってきた男を返り討ちにしたときの悦楽と同じ感情が胸を満たしていた。楽しくて楽しくてたまらない。たとえ相手が死者であろうと、無性に心が震えるのだ。

右から襲い掛かる化け物の顔面に突きをいれて砕き、面前から腕を伸ばしてくる化け物には胴を打ち込んで怯ませた後、その頭部に木刀を振り下ろす。
こいつらは力こそ強いものの、動きは死んでいるからか実に見切りやすい。今現在１０数体ほどと数が多いのは面倒だが、所詮はそれだけだ。
このまま他の化け物たちも片付けようと、木刀を構えなおした時だった。

「あぶねえ！！」

突然、男の声と思われるものが廊下に響き、それと同時にすぐそばを何かが通り過ぎたかと思うと、後ろからギャッという叫び声が聞

こえた。何事かと思い振り向けば、頭に日本刀が刺さった化け物が体を痙攣させながら倒れようとしていた。

――なぜ、日本刀が？いや、それよりも、危うく襲われそうになっていたのか？この私が？

「まったく、油断大敵だよお嬢さん？」

また、先ほどと同じ声が聞こえハッとすると、目の前では木刀を持った髪の長い男子生徒――おそらくは2年生――が化け物たちと戦っていた。

数で言えば1対10以上であるにも関わらず、その男子生徒はどこか余裕を持った表情で目にも留まらぬ速さで木刀を振るい、化け物たちの頭部を文字通り粉砕していき、時折右手で化け物を殴るとゴオッという風を切る音が聞こえたかと思うと化け物の体が宙を浮き、そのままガラスを突き破っていった。

そして目に見える範囲にいた化け物を倒した彼は、体の伸びをした後、私の横を通り過ぎ、化け物に刺さっていた日本刀を引き抜いて服で血をふき取った。

……この男、何者なんだ？これでも剣道部主将として、全国大会優勝者として様々な人間と戦ってきたが、私でさえ目視できないほどの速さで木刀を振るうなど人間離れした技術に化け物をあれほど殴り飛ばす力など、いったいどういう鍛え方をすれば――――。

「さて、大丈夫だったかい、お姫様？……とりあえず、そんなに睨まないでくれる？惚れちゃうじゃないか」

……っと、しまった。どうやら知らず知らずのうちに睨みつけてしまっていたようだ。

「すまなかった。突然のことでついね。……それより、君はいったい……？」

「俺？俺は小室恭介。気楽に恭介とか恭ちゃんとかダーリンって呼ぶんだっちゃ♪」

……なるほど、あの小室恭介か。これはまた大物に出会えたものだ。

ところで……、彼は年齢いくつなのだ？「だっちゃ」って、古いと思うのだが……？

第４話（後書き）

終わり方が中途半端で微妙に悩んでいる作者です。とりあえずアレで終わらせてみたけど、次は別の終わり方をしてみようかと思います。

話に関しては、はっきりいって支離滅裂です。毒島先輩が妙なキャラになったし、皆慣れるの早いし……。でもこれからもこんな感じで進んでしまいます。すみません。

誤字脱字などがございましたらご報告ください。ここまでお付き合いしてくださり、ありがとうございます。

第5話（前書き）

原作2話中盤にあたるところです。心理描写が難しいっす。主人公と今回の視点主除いて空気に近いっす。そんでいつもよりわかりにくいかも？

それではどうぞ。

第5話

俺の目の前には、毒島冴子さん――何故か呼び捨てできない――がいらっしゃいます。こうやって実物を見ると、実に武人の貫禄があると思う。まあ、内面の危うさとかもあるだろうけど。

「小室恭介と言ったが……、無理矢理入部させようとした空手部員を返り討ちにしたり人間をやめた存在と言われたり不良グループを壊滅させたという噂がある小室恭介でいいのかな？」

しばらく眺めていたら、冴子さんが俺のことを確認してきた。どうも俺の噂はこの人にまで広がっているようだな。てか、前のだっちゃ♪とかの部分はスルーですかそうですかちくしょう。

「今あなたが考えている小室恭介であってると思いますよ。そういうあなたは毒島冴子さんであってますか」

答えながらこちらも一応確認する。……ちなみにこの噂の最後のやつは『俺』じゃないけどな。

「ほう、君のような者に名を知られているとは、光栄だね」

クックッと笑いながらそう言う。冴子さんってこういうこと言えたのか。もっと堅物だと思ってたんだけど……。そして笑顔がかわいい。さすが『濡れるっ！！』発言した人！……いやまだ先だったな。

「ところで、その日本刀はどうしたんだ？」

あ～、やっぱしそっちに話がいくのね。さっきからちらちらと目線

が言ってたのは知ってたけど……。まあこんなのがあるなんておかしいにもほどがあるからな。

「これは少々訳あり――――」

「恭介！」

日本刀の説明をしようとしたとき、石井を慌てた様子で声をかけてきた。……人が話をしようとした時に横槍入れるとは、なんて奴だ！と思ったのは間違いではないと思う。

まあとにかく、いったい何事かと思うと……。

――――ア゛ア゛～～……。

遠くからだが『奴ら』の声が耳に入ってくる。しかも少しずつ大きくなっている。俺たちの戦闘音に反応しやがったか？

「このことは落ち着いたときにでも。今はここを離れましょう」

「そうみたいだね。……私一人では不安だから君たちといってもいいかな？」

な、なんだと……！？あの毒島冴子さんが俺（性格には俺含む３人）に頼ってきているだと！？まさかさっき助けたのでフラグが立ったか！？……ありえないな。多分俺といると生存率が上がるとか日本刀のこととかそういうのだと思う。

「そのぐらいわけないですよ。……できれば鞠川先生の護衛を頼み

たいですし」

ちらっと視線をぽやぁ～としている鞠川先生に向ける。一応石井が近くにいるとはいえ、やはり頼れる存在がいたほうが安心できるしね。石井？男が女に守られてどうするってんだよ？やられそうになったら助けるけどさ？

俺の意図を理解したのか、静かにうなづいて鞠川先生の近くに移動する冴子さん。……お前すごいな。

さて、それじゃあ行きますか……。

◇

女剣士こと冴子さんを加えた勇者（笑）一行は職員室にある鉄の馬を動かすためのアイテムを取りに移動中である。……あの冴子さん？何故あきれた顔してるのですか？

ちなみに途中で鞠川先生がこけて、冴子さんが遠慮なくプラダのスカートをビリビリと破く光景を、思わずポケットに入っていたケータイのカメラで撮影をした俺は悪くないと思う。直後に石井が削除しやがったけど。……ロマンの分からん奴。

閑話休題。

とにかく、途中にいる『奴ら』をある程度倒しながら進んでいくと、パシッ！パシッ！という音が遠くから聞こえてくる。どうやら『原作』通りになってるみたいだな。

「これは……、銃声か？」

「日本刀の次は銃かよ……。なのに驚かなくなる自分が怖い……」

冴子さんは銃声が聞こえることを不思議に思い、石井は次々と起こる現象に慣れてきたせいかちょっと鬱になっている。……諦めろ石井、これが現実だ。

「誰か職員室にいるってことかしら……。ひょっとして恭介くんの弟さん？」

「いや、あいつらは銃声が出るようなものは持ってないはずだけど……。てか、どうしてそう思うの？」

「だって、恭介くんの弟さんだから、そのぐらいはアリかなって」

鞠川先生、あなた俺たち兄弟をどういう存在だと思ってるんですか？俺はともかく孝は一部除いて普通なの知ってるでしょ？その乳揉むよ？

「……どうであれ、生存者がいるなら急ぎましょう」

とりあえずそれはこの際置いといて、3人に声をかけて職員室に急ぐ。職員室にいるのは予想通りなら高城沙耶と平野コータの二人のはずだ。普通なら冴子さんや孝が駆けつけて『奴ら』を退けるが、先ほど冴子さんが後ろを取られたことを考えると楽観視はできない

からな。

そして、職員室にたどり着くと……。

「来るなあああぁぁ！！！！」

高城が返り血も構わず電動ドリルを『奴ら』の眉間に押し当て、平野がマガジンの取替えをしているところだった。……敵の数は８つか。

「兄貴！！」

それと同時に上から声が聞こえたので顔を向けると、そこには孝、麗、永の３人がいた。どこも怪我をしている様子がないことから、どうやら予想のひとつは外れたようで一安心するが、今はこの状況を打破しなきゃな。

「右にいる『奴ら』を抑えろ！俺たちは左を！！」

「「「おおっ！（はい！）」」」

俺の指示にしたがって、３人は右の『奴ら』に、俺と冴子さんは左の『奴ら』へと向かっていく。

冴子さんが２体の『奴ら』の胴に木刀を打ち込んで後ろに下がらせ、すぐさま上段に構えて脳天に打ち込んでいく。俺は日本刀を一番近くの『奴ら』の首めがけて振るい、切断する。首は宙を舞うが、そ

れに構うことなく近くの2体にも同じように刀を振るっていく。孝たちも躊躇することなく『奴ら』の頭部にバットを振り下ろしたり、棒で突き刺したりして『奴ら』を倒してく。
……やっぱしこのメンバーとんでもないなオイ。たった数時間でここまでやれるのか。……ちなみに鞠川先生と石井は遠くで見てるだけ。戦闘力低いからしょうがないけど。

そういうわけで、10秒足らずであっさりと『奴ら』を倒したわけなのだが……。

「来るな来るな来るな来るな……！！」

俺たちに背を向けたまま、高城がもう動かない『奴ら』にいまだに電動ドリルを押し当ててるんだよ。その光景にみんなどうしたらいいのか迷っているようだ。……『原作』と展開違うのは俺というイレギュラーがいるせいか？とにかくアレ止めないと話が進まない……。

「おい高城。もうそいつは動かないって」

「クルナクルナクルナ……！！」

話しかけてみたが、どうも混乱しているのか、止めようとしない。
ある意味では人間らしい行動……なのか……？

「高城、もうそれ以上しなくていいからさ」

こういう時、声をかけても駄目なら肩に手を置いて止めれば———。

「ッ！？アアアアアアッ！！！！！」

ギュアアアッ！！！

「グッ……！？」

『奴ら』だと勘違いしたのか、ドリルをこっちの顔めがけて突き出してきた。突然のことに慌てて顔を左に逸らすが、右の頬に掠ってしまう。このときドリルを掴んで、なんとか離すことができた。後ろから悲鳴のようなものが聞こえるし頬を生ぬるいものが伝う感覚があるが、今はそんなことどうでもいい。

「まったく。お前ヤンデレ少女だったのか？悪いけどやめたほうがいいぜ？」

「……き、きょ…う…すけ……？」

どうやらさっきので目が覚めたようだ。体を震わせながらおぼろげな目で俺の顔を凝視していた。せっかくの美人が血やらなんやらで台無しだ。

「そうだよ。元気か、この天才さん？」

そう言って、笑顔を見せつつできるだけやさしく頭をなでる。小学校までよく高城にしてたことだ。これで何ができるなんて自分でも思うが、こんなんでも安心できるならとしてみる。
高城は最初、体を震わせたが、しばらく撫でていると次第に目から涙が出てきたかと思うと、突然俺に抱きついてきた。……えっなぜ？

「あの、高城〜〜？」

「う、う…あ……、あぁぁぁぁ……！！」

……泣かれちゃいました。いやこれ俺じゃなくて冴子さんの役目のはずなんですけど……。

まあ……、今は泣かせてやったほうがいいかな……？

◇

［ｓａｙａ］

パンッ！パンッ！

職員室の前で、私――高城沙耶――はデブオタの平野コータが釘打機を使って『奴ら』の頭に釘を撃ち込みながら倒していくのを後ろで見ていた。何故職員室にいるかは、脱出をするために車を使うという案が出て、それで職員室にあるだろう鍵を取りに来たのだ。

「高城さんも戦ってください！！」

「なんで私がそんな事しなきゃなんないの！？」

「もうすぐマガジンが空になるんです！！」

そういいながら後ろに後退していく私たち。でも、なんで平野が私に命令してんのよ！？マガジンぐらいぐらいさっさと替えればいいじゃない！いくら私が一緒に行動してるからって！

平野に苛立ちながら、頭の片隅に昔からの知り合いの双子の兄弟の、バカみたいなことをしまくる兄の顔が浮かぶ。……４人でどっか行ったけど、今どうしてるのかしら……？てか、なんで私を呼ばないのよ！？そのせいでこいつなんかと一緒にいるはめになるし……！！

「高城さん後ろ！！」

脳内で文句を言っていると、平野が血相を変えて叫ぶ。言われて後ろを向くとそこには近くまで寄ってきた男の『奴ら』がいた。なんでこんな近くに来るまで言わなかったのよ！？

『奴ら』が一歩こっちに近づいてくる。思わず後ずさりするも足を工具を入れていた袋に引っ掛けてしまい、尻餅をつく。でもそんなことなどお構いなしに『奴ら』は獲物を捕らえんとドンドン近づい

てくる。

「よ、寄らないで……、来ないで……！！」

懇願したってすでに死んでいる『奴ら』が聞いてくることはない。見えるはずのない、血を流す感情のない目をギロリと私に向ける。

――――殺される。

その言葉が私の頭をよぎる。ここに来るまでに目にしてきた他の生徒や先生のように、腕を、足を、臓器を無慈悲に喰らわれる。……そんなのイヤ。こんなところで死ぬなんて……絶対にイヤ！！

「来るなあああぁぁ！！！！」

そう思った時には、もう持ってきていたドリルを使って近づいてきた『奴ら』を刺していた。返り血が私にかかるけど、そんなの気にしてられない。殺さなければ殺されるんだ。

殺さなきゃ殺さなきゃ殺さなきゃ殺さなきゃコロサナキャコロサナキャ……！！！

――――おい高城。

聞き知った声が聞こえる。でも、そんなことよりも『奴ら』をコロサナキャ……！

――――高城。

また聞き知った声が聞こえたと思うと、何かが私の肩に触れた。……まさか『奴ら』！？

「アアアアアッ！！！！！」

「グッ……！？」

肩に触れる『奴ら』の頭にドリルを突き刺そうとする。だけどそれは頭を動かすことで、わずかに頬を掠めただけで避けられてしまう。それと同時にドリルが掴まれてとられてしまう。

……それより、今の声って……？

「まったく。お前ヤンデレ少女だったのか？悪いけどやめたほうがいいぜ？」

「……き、きょ…う…すけ……？」

視線を向けると、黒い髪を背中まで伸ばしたどこか気楽そうな顔をした男――小室恭介がいた。だがその顔の頬からは止め処なく血が流れている。

わ、私……、恭介を殺そうとしてたの……？よりにもよって……？

すると、恭介はこっちに手を伸ばしてきた。私は殴られるものだと思い、目を瞑った。

「そうだよ。元気か、この天才さん？」

しかし私が予想したのとは違い、ふわりと頭に手を乗せて多少がさつだけども頭を撫で始めた。

小学校を卒業するまで、泣いたり怒ったりする私を恭介はおちょく

ったような言葉を吐きながらもこんな風に頭を撫でてくれた。あの頃からずいぶんと時間が過ぎたけど、この感触は変わってないように思えた。

———そして、意識しないうちに、恭介に抱きついて泣いていた。目から何かが流れているのはきっと気のせい。

第5話（後書き）

読み返してみると、普段よりシリアスが多かった……。ギャグとシリアスを半々ぐらいのつもりだったのに、どうして？

あと、ヒロインに関しては実はまだ決まってなかったりします。なのでフラグっぽいのは立っても意味がなかったりしますので。

そして、できることなら女性の心理を詳しく知りたい……。本とかでなんとかなるんでしょうか？

では、ありがとうございました。

第６話（前書き）

話飛ばすは当たり前？訳分からないは当たり前？

そんな小説ですけど、それでもＯＫな人はどうぞ。

……いつになったら学園脱脱出できるんだろう？

第6話

「ほ～ら高城さんツン子様、恭介お兄さんですよ～～。泣いていいんだよ～。抱きついていいんだよ～。俺はお前のすべてを受け止めてやるから、さあ、我が胸にジュストフィットジャンピング！！」

「うるさいうるさいうるさい～～い！！！」

ギュアアアア！！！

「おっとドリルはいただけないなあ？俺はそんなもので掘られるよりお前の穴をいじくるほうが――――」

「この……、変態がああああ！！！！！」

怒られました。

◇

職員室で、俺は元気になった高城をおちょくった後、何か使えるものがないかを探していた。他のメンバーは思い思いに休み、高城は部屋の隅で「あれは事故あれは事故あれは事故……」とブツブツと呟いている。それと、現在のメンバーの装備を確認すると……。

俺：木刀、日本刀
孝&永：金属バット
麗：モップの柄
平野：改造釘打機
冴子さん：木刀
石井：点滴スタンド
高城&鞠川先生：工具と医薬品

とまあこんな感じだ。……実は俺は他にも護身用に持ってるのがあったりするけど、これはまだ使う予定はない。今から使うと混乱招くだけだしな。

「……期待してなかったけど、こんなものぐらいしかないか」

さて、隅々まで探してみたが、結局見つかったのは誰かが置いていったのだろう折りたたみ式の携帯電話とボールペンが２０本だけだった。携帯はあれば連絡とか使えるけど、この先の未来を『原作』で知ってるため、所詮一時しか使わないだろう。いざとなったらボールペンともども『気』で強化して投擲武器で使えばいいか。

「恭介君」

後ろから声をかけられたので振り返ると、冴子さんが日本刀を持って立っていた。なぜ彼女が持ってるかについては、日本刀を見せてほしいと頼まれたからである。

「鑑賞し終わりましたか？」

「ああ。……しかし、よくこのような粗悪品であそこまで切れたものだな」

粗悪品って……。普通に買うことができないから裏ルートでこっそりと、大金叩いて買ったんだぞ？そしてばれないように保健室に隠してたんだぞ？刀の良し悪しに関係ないけど。

……どうせだから、今のうちにこいつらには『気』のことを話しておいたほうがいいな。後でいらぬ誤解を招くのはいやだし。

「それは俺の腕がいいから……じゃなくて、ちょっとした手品がありましてね」

「手品？」

「そうです。……冴子さんは、『気』って信じますか？」

「……それは何かの冗談かな」

おお、なにやら冷めた目で俺を見てくるよ。くやしい！でも感じちゃう！ビクッビクッ！！……なぜかさらに厳しい目になったんだが……。読心術でもできるのか？

「あ、あ～～っとですよね……、それじゃあこのペンを見てください」

場を繕うためにデスクにおいてあるボールペンを2本ほど手に取り、一本を壁にペンをダーツの矢のように投げる。それは刺さることなく壁に弾かれてしまう。冴子さんは何をしているのかという顔をする。よく見ると周りも何事かとこっちを見ていた。

一人一人に説明する必要がなくなったなと思いつつ、残ったボールペンに『気』を纏わせる。それを先ほどと同じように投げると、今度は浅くだが壁に突き刺さった。その光景に『気』のことを知らない者は驚いていた。

「あ、あんた！？一体何したの！？」

呟きモードから戻った高城がありえないという感情を隠すことなく聞いてくる。ま、ボールペンなんかで壁に刺したんだからそういう反応は当たり前だな。

「『気』だよ。ボールペンに『気』を纏わせて鋭利さを増したんだよ」

「『気』って……、いくらアンタが人をバカにするような奴だからって、それは無いでしょ！？」

ヒストリックに叫ばないでよ高城。あと人をバカにするんじゃないよ、お前は俺のことをそう思ってたのか！？知ってたけど！！

「兄貴の言ってることは事実だよ」

ここで孝が助け舟を出してくれた。よくやった孝！お前がそう言え

ば、お前に惚れている高城なら真剣に聞いてくるはずだ！！多分。

「あ、あんたまで何言って……！！」

「高城、悪いけど本当のことなんだよ」

「確かにありえないことかもしれないけど、恭介さんと孝は本当に『気』が使えるの」

「井豪、宮本、あんたたちまで……て、孝もってどういうこと！？」

さらに永や麗までも加わって俺の言ったことを肯定する。それに狼狽しながらも、孝も使えるという部分に反応して孝のほうに顔を向ける。俺は冴子さん、鞠川先生、平野、石井の順番に顔を見てから、真剣な表情になる。

「それを今から説明するから、落ち着いて聞いてくれないか？」

———かくかくしかじかの、ぱくぱくうまうま。

「というわけなんだ」

えっ？説明が雑すぎるって？いや長ったらしいからバッサリ切り捨てたんだよ。言ったところで『気』の再確認ぐらいしか意味が無い部分だしね。どういう説明だったかは各人妄想じゃなくて想像してね？

「なるほど、だからあそこまでの切れ味と力があったわけか……。納得だな」

「医学の観点から見ても、不思議としか言えないわよね～～」

「ほんと、漫画の世界の奴が現実にいたって感じだな…」

「ありえない……。『奴ら』もそうだけど、この兄弟もありえない……」

「……あれ？なんだか驚こうと思っても驚けないな……」

俺の説明を聞いて、上から冴子さん、鞠川先生、平野、高城、石井の順番で、思い思いに評価していく。あと石井、お前諦観してきてないか。

「まあそういうわけだけどさ、俺は『気』を使ってどうこうしたいとかそういう気はないから、信用はしてくれるか？」

こんなふざけた力持ってるやつがいたら、どうしても恐れとか抱いちゃうかもしれないから、ちょっと心配なんだよな。

「そのぐらいで、君たちに敵意を持つなどありえんよ」

おお、冴子さんは心広いな！

「第一、敵対したところで君に私たちが勝てる確率は低そうだしね」

「「「「「「「うんうん」」」」」」」

あれ、そういうことなの？てか俺除いた全員が頷いてるし……。いくら俺でもあんたら全員を相手にして無傷とか無理だと思うんだが？……そういう問題じゃないのかな？まあ一応は信用してくれるってだけでもよしとしようか。

「そっか、ありがとうな。……んじゃさっそく、試したいことがあるんだが、石井。悪いけど点滴スタンド貸して」

「？　一体なにするんだよ？」

石井がクエスチョンマークを浮かべながらも点滴スタンドを差し出す。俺はそれを受け取って机の上に足？のと点滴引っかける天秤部分が出るように置く。そして日本刀と自身に『気』を込め、

「チェストーーー！！」

足？の部分の付け根に気合を込めて振り落とす。俺でも見えるかどうかの速さで振り下ろされた日本刀は、ステンレス製であるソレを歯牙にもかけずに叩き斬る。皆が「ハッ？」って顔をしているがそんなことなど気にせずに天秤部分の付け根を同じように叩き斬る。……うむ、素晴らしい切れ味だ。断面なんか綺麗にもほどがある。

「お前、いきなり何やってるんだよ！？」

「何って、いやだって足？とか天秤ついたままだと使いづらいだろ

？だからこうやれば鉄パイプとして使いやすくはなるし」

ちなみに斬れなかったとかそんなことはまったく思ってない。なぜなら過去に包丁を使って鉄パイプを斬ったことがあるからだ！！……あとでバレてこっぴどく怒られたけど。

「な。うちの兄貴、規格外だろ？」

「「「あれ、本当に人間？」」」

お～い、お前ら聞こえてるぞ～～？

――――こんなこともあった俺たちだが、その後テレビの放送を見て騒いだりいろいろと物議を醸したりして、部活遠征用のバスを使って学園を脱出ということになった。

えっ？話を飛ばしすぎ？それは説明がめんど――ゲフンゲフン！！とにかく、俺たちは脱出することになったんだ！職員室でのことを知りたきゃ原作読め！！……あ、ちょっ、ま、石を投げないで。

◇

［ｋａｚｕ］

俺は自分のことを、大してなにかできるわけでもない、ごく普通の人間だと思っている。特に今の状況下だと、そのことをさらに実感する。

「右だ麗！」

「ッ！テアァッ！！」

宮本が右から襲ってきた『奴ら』を避け、その首に狙い澄ました一突きを胴体に当て動きを止めた後に、井豪がその頭にバットを振り下ろして倒す。

「平野君、援護を頼めるかな？」

「了解しました！」

毒島先輩が木刀を鮮やかに繰り出して『奴ら』を倒していき、その隙をつこうと襲ってくる『奴ら』を平野が釘打ち機から撃たれた釘を次々と頭に命中させていく。

「孝～、もうちょい頑張れよ～～？」

「へっ、この程度わけないって！！」

そして、小室兄弟は先陣を切って次々を『奴ら』を壊滅させていく。日本刀が振るわれれば首や胴が斬り裂かれ、バットが振るわれれば普通じゃ考えられないほど吹き飛び、後ろから襲われても背中に目

があるんじゃないかと思うほど『奴ら』の攻撃を避けて返り討ちにしていく。

俺は1、2体相手にするのが限界なのに、あいつらはそんなの関係ないといわんばかりに『奴ら』をどんどん倒していく。『奴ら』と戦ったり『気』なんて力を受け入れているあたり、俺もある意味では普通じゃないのかもしれないけど、それにしたってあいつらはこの環境をあっさりと受けいてすぎてると思う。小室兄弟なんかどこか楽しそうにしてるし……。

「俺がおかしいのか、あいつらがすごいのか……」

「どうしたの石井くん？」

俺の隣にいる鞠川先生が心配そうな顔で話しかけてくる。鞠川先生や高城は戦力としては微妙なので戦うなんてことはさせず、俺は一応の護衛として近くにいる。……それより、声に出てたのかな？

「いえ、なんでもありませんよ。ただ、いろいろなことが一度に起こったんで、ちょっと考え込んじゃいまして……」

「あぁ～分かるわ～～。ゾンビのようなのが出てきたり、小室くんたちが凄い力持ってたり、日本刀が出てきたり、本当大変よね～～」

「先生、本当に大変だって思ってますか？」

高城が訝しげな目線を鞠川先生に向ける。鞠川先生は「本当に思ってるわよ～！」って言ってるけど……、すみません、俺もそう思えませんでした。これはこれで凄いことなのか？

そんな感じで前衛の６人が『奴ら』を徹底的に潰していって、時々俺らの近くに来るやつがいるが１体程度なので鉄パイプと化した点滴スタンドを使って倒すといったことを繰り返して廊下を駆ける。しばらくすると階段に差し掛かったところで、叫び声が聞こえてくる。生き残りがいたのか！？
それを目にする前に、先を行っていた孝と毒島先輩、宮本と井豪が飛び出していく。「ドシャッ！」という音が数個聞こえたと思うと、何かが倒れる音が聞こえる。急いでそこに行くと数人の生徒が隅に固まっており、その周りには『奴ら』の（死んでるけど）死体と生き残りを囲むように孝たちが囲んでいる。恭介だけは階段の途中に立っている。

「お、おい大丈夫か？」

俺や高城、先生が生き残りの近くに行こうと恭介の近くを通って階段をおり――――。

「面倒なことやりやがって……」

――――！？恭介の声でそんな言葉が聞こえたように思え、恭介のほうに首を向ける。しかし恭介は安堵したかのような表情をしているだけだった。……気のせいか？
なんだか気にはなるが、今は目の前の生き残りのほうに気をかける。

「噛まれた者はいないか？」

「え……！いませんいません！」

「そうか……、僕たちは学校から逃げ出すけど、一緒に来るか？」

孝が脱出の意図を伝えると、彼らは静かに首を縦に振る。……しっかし、ずいぶんと大所帯になったな。いくらバスで逃げるからって行っても、これだけの人数を連れて無事に学園を出れるのか？

そんなことをついつい思ってしまうが、これじゃいけないなとそんな考えを捨てるように頭を振るう。こんな状況なんだから生きた人間は多いほうがいいよな。

前に孝、豪、毒島先輩が、真ん中に俺と鞠川先生、高城、平野に生き残りの5人、後ろに宮本、恭介という形になって階段を慎重に下りていく。

だから、後ろにいた恭介が苦々しい顔をして加わった5人を睨んでいたことに気づけなかった……。

第6話（後書き）

今回の後半の視点は石井くんですからね？オリキャラじゃありませんよ？……ある意味オリキャラですけど。

しっかし、主人公の性格が妙なことになってきている。確かもっとマシな性格なはずだったのに、いつの間にか生き残りを疎ましく思ってる主人公に……。

まあ、こんな主人公ですが、どうかよろしくお願いします？では。

人物紹介（前書き）

本作品に登場するキャラクターの説明です。
説明といってもオリキャラの簡単な説明と、原作キャラの一応の説明ぐらいです。

なお、この説明は第６話時点での説明であり、いずれ更新されるかもしれないですので注意してください。

人物紹介

【小室恭介（こむろきょうすけ）】

・身長：１８０ｃｍ

・容姿：顔立ちは原作主人公の小室孝にそっくりで、髪を背中まで伸ばしている。

・所持武器：木刀×１、日本刀×１、？？？

・ＣＶ候補（妄想）：関俊彦、小野大輔、森田成一

・本作品の主人公で、転生者。かつて一度死んで転生しているが、転生先が『バイオハザード』のゾンビまみれのラクーンシティであり、転生字の能力を駆使して知り合った男と脱出を図ろうとするがゾンビに噛まれたために脱出をあきらめラクーンシティに残り、核弾頭により命を落とす。この間わずか２日間であった。

その後『学園黙示録』の世界に、原作主人公の小室孝の双子の兄として転生することになり、その関係で原作キャラと関わりを持つことになり、そのまま藤美学園に入学、そして原作へと突入していくことになる。

性格はボケ。真面目であることもあるが、どっちかというとボケキャラ。そしてセクハラ発言は当たり前にするある意味女の敵。自分の身内や知り合いなら助けるが、紫藤を殺そうと思案したりあまり関わったことのない人間には大して興味がない。

転生時に授かった特典の１つの『身体強化』により、建物の３階から飛んでも平気だったり百ｍ走で５秒という記録を出したりしていたので、運動系部活の勧誘がすさまじい（本人はズルしてるとい

うことで入部はしない）。また、『気』の力を使えばさらに身体能力を上げることができるので、もはや人間を超えた存在となっている。

はっきり言ってしまうが、本作品最強のキャラクターである。唯一勝てる可能性としたら、能力が遺伝してしまった小室孝ぐらいである。

●能力および特典

・身体能力の強化…人間に出せる限界まで身体能力（力、速さ、頑丈さ、反射神経ｅｔｃ…）を強化する。

・未来予知…未来に起こりうる危険を予知させる能力。ただしいつの時期に起こるものなのかが不明瞭であり、予知の仕方も、頭に一瞬だけその光景を見せるという曖昧なもののため、役に立つことは少ない。

・『気』の力…自身の身体能力や物の強化を行うことができる力。イメージとしては体の内にあるエネルギーを身体や武器に流すことで使うことができる。発動していると淡く光る黄色い光のようなものに包まれるが、それを目視できるのは恭介と孝の二人だけである。

これを肉体に使えば、筋力の向上や速力の上昇や五感の強化を、物に使えば頑丈さや切れ味、鋭さなどが増す。

ただし、『気』を使用すると体力を消耗するので、最長でも１日しかもたない。

・無限弾ツール…文字通り銃弾を無限に増やすもの。ただし、ある時期までは譲渡されないということで、現在は所持をしていない。

【小室孝（こむろたかし）】

・『学園黙示録』の原作主人公で、普通の人間であるはずだったが、恭介の双子の弟として生まれたせいか、能力の一部が遺伝してしまい、ちょっとした格闘家程度なら倒せてしまう上、さらに『気』の力も使えるようになってしまった。『気』の力に関しては知ったの学園に入るころである（恭介はごまかすために突然変異だとか脳のリミッターが外れたといった嘘をついている）。

本来存在しない人間の恭介によるものか、宮本麗に対して恋心を抱いていない。なので麗が井豪永と付き合うことになんら異存はない。また、たまに永とともに恭介を倒そうとしたりする。

本作品においては、小室恭介、毒島冴子とあわせて三強の位置に属している。

・所持武器：金属バット×1

【宮本麗（みやもとれい）】

・『学園黙示録』の主要ヒロイン。基本的に原作と相違点無し。小学校の頃から（セクハラ発言とか問題行動的な意味で）恭介が悩みの種の一つであったりする。現時点で永が死んでいないため、今でも永の恋人という立場である。

・所持武器：モップの柄×1

【井豪永（いごうひさし）】

・『学園黙示録』の原作キャラ。基本的に原作と相違点無し。中学くらいに小室兄弟と宮本に出会い、たびたび恭介なんでもありな試合をしていたりする。本来噛まれて『奴ら』になるはずだったが恭介の行動でそれは阻止され、生存している。

・所持武器：金属バット×1

【高城沙耶（たかぎさや）】

・『学園黙示録』の主要ヒロイン。基本的に原作と相違点無し。昔に恭介にやさしくしてもらったためか、恭介にちょっとした感情を抱いていたりする。ただしセクハラ発言などのせいで思いっきり揺らいでいる。通称ツン子。

・所持武器：ドリル（対恭介専用？）

【平野コータ（ひらのこうた）】

・『学園黙示録』の主要キャラ。基本的に原作と相違点無し。ほかのメンバーと比べると、多少小室兄弟やその関係者と関わっている程度であったりする。

・所持武器：釘打ち機（改造済み）×1

【鞠川静香（まりかわしずか）】

・『学園黙示録』の主要ヒロイン。基本的に原作と相違点無し。恭介が保険委員の関係で恭介とはとく顔をあわせ、恭介関係者とも顔見知りである。恭介のセクハラ発言をある程度受け流せたりする。

・所持武器：無し

【毒島冴子（ぶすじまさえこ）】

・『学園黙示録』の主要ヒロイン。基本的に原作と相違点無し。本作三強の一人で、恭介でさえなぜか呼び捨てできない存在。『奴ら』との戦いに悦びを見出していたりする。読心術ができるのではないかという疑惑？がある。

・所持武器：木刀×1

【石井和（いしいかず）】

・『学園黙示録』の原作キャラ。保険委員の関係で恭介と出会い、そこから恭介関係者と縁を持つようになる。恭介にツッコミを入れ

る貴重な存在でもある。本来なら鞠川先生を庇い、『奴ら』になる前に毒島冴子の手でこの世を去るはずだったが、恭介が現れたことにより、生存する。

・所持武器：鉄パイプ（元点滴スタンド）×1

人物紹介（後書き）

とりあえず主要キャラの説明はこんなものです。
独自設定入ってますのでご注意ください。

第7話（前書き）

今回も無茶、突拍子もない、わけわかんないの3拍子でお送りいたします。
それでもいい人は、つまらないですがどうぞ。

……キャラクターの多くが空気になってるのどうしよう。

第7話

やあどうも。みんなが愛してやまない恭介お兄さんだよ。……えっ？いきなりなに言ってんだこの変態はだって？そんなことを言わないでよ。だってさ、5人ほど俺の知らない奴らが混ざったんだよ。うっとしいじゃん。

いやさ、俺は身内とかちょっとした顔見知りなら助けようかななんて思うかもしれないけど、まったく知らない人間まで助けようと考えるほど心広くないもん。特にこういう死人が徘徊するような世界じゃあね。人数が多いと良いことより悪いことのほうが多くなると思うんだよ。例えば人数分の食料の確保とか、ある程度意思を統率するとか色々と
。

おまけに、生き残りの5人は俺らのメンバーに比べてもお世辞にも期待できそうにない。孝や冴子さんたちのように強いわけじゃない、高城のように頭いいわけじゃない、鞠川先生のように治療できるわけじゃない、石井のように精神力が強いわけじゃない。

つまり、何が言いたいかと言うと、俺の目の前にいる生き残りの5人、なんとかうまく排除できないかなってことだ。

「……と言いつつ、そこまで残酷になれないんだけど」

人としては褒めるべき感情だろうけど、いざって時は捨てなきゃ生き残れないものだから、悩むんだよな。

「どうした恭介君、悩み事かい？」

「あっ、たいしたことじゃなくて、冴子さんのお胸はどのようにして育ったのかと」

「周囲には警戒したまえ。突然『奴ら』が出てくるかもしれないからな」

ひ、ひどい！スルーするなんて、ボケを殺す気ですか！？イジメ反対だ！！

さて、そんな俺たちだが今は玄関にいる。ここから出ればあとはバスのある場所まで一直線なのだが、玄関には『奴ら』がうようよいる。なので靴箱を利用して絶賛隠密中なのだ。今までなら強行突破も考えられたが、人数が多くなったうえに外にも『奴ら』が大量にいる以上、うかつな行動はできない。

「見えてないんだから隠れる必要なんてないのに……」

高城さん、確かにその通りなんですけど、ひょっとしたらなんてことがあるじゃないですか。

「それじゃあツン子さん証明してよ」

「うっ、それは……って、誰がツン子よ！？」

おおさすがだツン子さん。ちゃんと突っ込みを入れてくれるとは。しかも声を小さくしてまで。突っ込みクイーンを自称できるじゃないか。

「ったく、しょうがないな……。僕が行くよ」

おっ、名乗り出たなわが弟、主人公よ。『原作』でもやってたしな。それに例え戦闘になっても孝ならあの程度なら返り討ちにできるだろうし。

「そうかい。それじゃあガンバ、孝」

「……随分と軽く決めるものだな。ここは私や恭介君でもいいと思うが？」

「毒島先輩や兄貴はもしものために控えといてください。それに、あの程度なんともありませんよ」

冴子さんの言葉に冷静に答えを返し、獰猛な笑顔を浮かべる。……あいつ、あんな顔とか作れるんだな。……俺のせいじゃないよね？そうだよね？性格遺伝までしてないよね？　そんな俺の心配をヨソに『奴ら』の中へと移動していこうと———。

ザッ……、ザザッ……。

（……！？　なんだ今の！？）

「？　どうした兄貴？」

「……なんでもない。気をつけろよ」

俺が妙な態度をとったからか、途中で足を止めてこっちの顔を伺うが、すぐになんともないとアピールする。それでも納得しないよう

な顔をするも、すぐに表情を引き締めて、行動を再開する。

……本当は妙な未来が見えたんだけどね、とは何故か言えなかった。さっきの音は未来予知により現れるヴィジョンが出る際に聞こえる音だ。これが起こるときは、危険が起こることを予兆するときだけだ。もっとも一瞬しか映らないし、いつ起こるかの時期が不明だからなんともいえない予知だけど。

（っでもよ、今のはなんだったんだ……）

今さっき現れたヴィジョンは二つ。一つは赤く太めのロープとか綱のようなもの。もう一つはゴツイボディビルダーのような後姿。前者は水分のようなものが垂れていて、後者は近くにいる『奴ら』とは比較にならない大きさ。……今まで見てきたどのヴィジョンよりわかりづらい、だから伝えるのを戸惑ったのだ。不確定な未来を予見して不安にさせるのはナンセンスだからな。

不可思議なヴィジョンについて考察していたら、遠くでガシャンという音が聞こえる。何かと思い靴箱から顔を覗かせると、玄関に集まっていた『奴ら』が廊下の向こう側にのろのろと移動していた。孝はというと、玄関のドアを慎重に開けていた。いい仕事してますね。

一応外の確認をしてからこちらに手で合図を送ってくる。それに合わせて俺と冴子さんが先行してドアの近くにまで来て武器を構えあたりを警戒する。そして次々と足音をなるべく立てないようにドアをくぐりぬける。どうやら無事にいけそうで――――。

ガキイイィィィン！！！

金属同士がぶつかり合う音が玄関から響いてくる。その甲高い音は学園中に聞こえてるんじゃないかと思わせるさせるほどだ。音源を探ると、刺又を持った学生が呆然と扉を見つめていた。次に外を見渡すと、音に反応した『奴ら』の多くが一斉に顔をこっちに向け、俺たちのいる方向へと動き始めた。……たくっ、面倒くせぇなおい！！

「「　走れ！！　」」

俺と孝の声が重なる。本当なら大声を出すべきではないだろうけど、あんな音を出されたんじゃ意味がないだろう。
バスはここからだと２００か３００ｍぐらいか！？だけどそこにたどり着くには、仲間とともに数多の『奴ら』を倒さなきゃならない！……楽なゲームじゃないな！！

「だったら、殺戮ショーでもご覧あれってんだよ！！」

憂さ晴らしに近い形で右手の刀を使い、近くに寄ってくる『奴ら』の首を跳ねていく。時には左手の木刀であらん限りの力で横に一閃させ、『奴ら』の胴体にめり込ませていく。当たった衝撃でそのまま吹き飛ばし、他の『奴ら』を巻き込ませる。とはいえさすがに今までより数が多く、学園の人間ほとんどいるんじゃないのと思うほどだ。……転生者は厄介事に巻き込まれやすいって聞いたことがあるけど、本当にイヤになるな。が、弱気になってもしょうがないってね！！

「全員死にたくなければ走れ！！バスに乗れればなんとかなる！！」

我ながら似合わないことを言うと自嘲しながら、再び刀と木刀を構えて『奴ら』に攻撃していく。刀を脳天に突き刺して横に引き抜き、

引き抜いた勢いのままに独楽のように回転して周囲にいる『奴ら』の体を切り裂く。何体かは胴体を切り裂くことができたが、他は傷は浅かったようだ。しかし動きを止めることができた。そこに木刀での強烈な突きを食らわせて距離を離す。
他の奴らは大丈夫かと確認すると、さすがに孝たちはこの程度で苦戦することなく突き進んでいるが、やはり圧倒的な数のせいか疲れが見え始めている。見るからに体力の少なそうな平野は肩で息をしてるし、高城や鞠川先生はやはりというべきか、途中で動きが止まってしまうことがある。その間に『奴ら』に襲われそうになるが、意外なことに石井が善戦して守っている。……お前本当に石井？
ちょっと失礼なことを考えてしまったが、これは俺にまだ余裕があるということで納得して、戦えない者を庇うようにしながら移動し、誰一人かけることなくバスまで来ることができた。意外だなとは思ってしまったのは内緒だ。

「鞠川先生、バス動かせるかどうか確認して！」

「う、うん！」

鞠川先生を最初に乗せ、次に非戦闘員を次々と乗せていく。その間にも戦える者で獲物を食らおうとする『奴ら』を倒していく。俺と孝でバスに寄ってくるのを倒し、永や平野、冴子さんが入り口を死守する。ちょっと離れたところではバットを持ったタオルを首にかけた男子生徒とそれに付き添う女子生徒がバスに乗ろうとしていた。あれを乗せればあとは脱出するだけ。紫藤の奴もまだ来てないから、一応学園脱出はハッピーエンドってことかな？自分でも驚くくらいにうまくいったことに安堵し、ふと、なぜか分からないが、バスの天井に目をやる。
するとタオルの男の真上に、赤い『何か』が蠢いていた。最初はバスの屋根に上った生存者か『奴ら』と思ったが、『ソレ』が動き、

視界に完全に映った瞬間、俺の時間が止まった。

――――頭部と思われる部分から剥き出しになった脳のようなもの。全身を筋肉組織で覆ったかのような体。人間のものとは比べ物にならない巨大化した爪。そして口から覗かせる蛇のような舌。

「タオルの！今すぐ逃げろ！！」

『ソレ』が何かを理解した瞬間、すぐ真下にいたタオルの男子生徒に叫ぶ。しかし男子生徒は近くに『奴ら』がいると思ったのか、女子生徒を庇うようにバットを構える。

まずい。そう頭で判断して急いで駆け寄ろうとするが、『ソレ』がバスから飛び降りて四つん這いの状態で二人の前に着地する。現れた異形の『ソレ』に女子生徒が悲鳴をあげ、男子生徒が無謀にも『ソレ』に向かって攻撃しようとする。

「ッ！？やめ――――！！」

ありえないとわかっていても、止めようと叫ぶ俺の声もむなしく、『ソレ』は口から槍のごとく舌を伸ばし、男子生徒の喉元を貫いた。

◇

［ｔａｋａｓｈｉ］

目の前で起こった光景に、僕たちはみんな動きを止めた。本来『奴ら』が周りにいるときに止まるというのは自殺行為だが、そんなことも考えられないほどの光景だった。

『奴ら』とは毛色の違う、正真正銘の化け物というべき姿をした『異形』が、口から舌と思わしきものを伸ばして、タオルをかけた男子生徒の首を貫いた。男子生徒は小さく呻き口から血を吐く。そしてバットを手放して体を数回痙攣させる。『異形』が舌を引っ込めると同時に男子生徒は地面に倒れふした。

「卓造っ！！」

男子生徒の近くでその光景を呆然と眺めていた女子生徒は意識が戻ったかのように、男子生徒の名前を叫びながら体を揺り動かす。

僕は、今まで感じたものと違う危機感に思考も体も止まり、ただその場に突っ立ってしまう。しかしそんな僕に関係なく、『異形』は絶命した男子生徒に叫ぶ女子生徒のほうに顔らしきものを向けて、這うように近づいていく。

――――逃げろっ！

そう叫びたいのに、声を出すことができなかった。声を出したら『異形』が僕のところへと来るんじゃないかという考えが浮かんで、行動することができなかった。

『異形』はそんな僕を嘲笑うかのように、這うスピードを速めて、女子生徒の数メートル近くまでくると勢いよく飛んで、右腕を振り上げて巨大な爪で女子生徒を切り刻まんとしようとして――――。

「ッダアアアア！！！」

胴体と右腕を真っ二つにされた。兄貴の持つ日本刀によって切り裂かれた腕と胴体はそのまま女子生徒の真上を越えてバスへとぶつかる。幸い窓などには当たらなかった。『異形』は切り裂かれたにもかかわらずしばらくは大量の血を流しながらジタバタと動いていたものの、最期には動かなくなった。

「……ハッ……ハッ……」

『異形』が死んだのを目にしてか、息を荒くしながら呼吸をする。無意識のうちに呼吸を止めていたんだろうか……。今すぐにでも地面に座り込んで落ち着きたい……。

パスッ！

乾いた音が聞こえたかと思うと、僕の横をなにかが通り過ぎて倒れる。頭に釘が刺さった『奴ら』だ。

「小室何してるの！？早くバスへ！！」

バスの入り口を死守している平野が釘を『奴ら』に撃ちながら必死の形相で叫ぶ。……そうだ。今はここから脱出しなきゃいけないんだ。何をしてるんだ僕は！？

急いでバスの入り口へと走っていく。途中で兄貴たちのほうを向くと、泣きながら男子生徒の名前を叫ぶ女子生徒の肩をつかんで諦めろと叫んでいるが、しかし女子生徒は動こうとしない。兄貴がそれに苛立ちを浮かべて、ついに無理だと判断したのか立ち上がってその女子生徒から離れようとする。

「……ってくれぇ！」

入り口まであと少しという所で、男の声が遠くから聞こえてくる。声がしたほうを見れば、スーツに眼鏡をかけた男性教師と数人の生徒がこっちに向かって走ってきていた。あれは……、紫藤先生か？

「もうバス出せるわよ！！」

鞠川先生があせった声で言う。確かにこのまま行けば確実に脱出できる。けどまだ生き残りがいる以上は助けたいけど……、前に兄貴が話したことがあるからか、どうしても紫藤を乗せるのを戸惑ってしまう。しかしこのまま考えていても『奴ら』がどんどん集まってくる――――。

「孝！！」

どうするべきかと悩んでしまっていると、兄貴が切羽詰った声で叫びながらこっちへと走ってくる。何事かと思った刹那、背中を悪寒が走り、すぐさまその場から飛びのく。それと同時に今までいた場所に何かが降ってくる。すぐさま姿を確認すると、そこにいたのはさっき兄貴が倒したはずの『異形』だった。しかも2体もいる。なんでこいつがまだこんなにいるんだよ！！と叫びたくなったが、一体の『異形』が口をあけて舌を伸ばしてきた。咄嗟に『気』を纏わせたバットで叩き落とすも、舌は鞭のように動き再び僕を狙ってくる。それもなんとか凌ぐものの、次から次へと攻撃を仕掛けてくるうえ、『奴ら』もこっちに向かってくるので、どうしても防戦一方となってしまう。

もう一匹は兄貴のほうに向かい、同じように舌を伸ばすも、日本刀によって切られてしまう。最初こそひるんでいたがすぐさま爪を使った攻撃へと変更して、ヒットアンドアウェイの要領で襲う。

戦えるメンバーが僕たちを乗せるためにバスの入り口付近で『奴

ら』と戦っているけど、このまま『奴ら』がバスに群がったらバスが横転する可能性だってある。なら、先にあいつらを脱出させたほうがいいはずだ。

「永、僕たちをおいて先にバスで逃げろ！！」

「ッ！？何言ってるんだよ！ここまで来てお前を置いていけって……！？」

「けどこのままじゃ脱出できないぞ！？」

声を荒げて脱出を促すが、それでもあいつらはそうしようとせずに戦い続ける。こんなときぐらい従ってくれたっていいだろうが……！

ドッ！！

その一瞬の隙を突かれて、僕の胴めがけて『異形』が体当たりを仕掛けてきた。さっきから舌しか使ってこなかったせいで、瞬発力があることをすっかり忘れていた。

「ガッ…！？」

重たい一撃を浴びて、僕の体は後ろに飛ばされ、背中から地面へと倒れる。体が痛みで悲鳴を上げるのを無視してすぐに立とうとするも、『異形』はこちらに巨大な爪を構えながら飛び掛ってきていた。皆の叫び声が聞こえてくる。それを聞きながらも、僕はまったく動くことができずに迫り来る『異形』から目を離せないでいた。本当ならもっと速いであろうその動きが、僕にはひどくゆっくりに見えた。事故なんかでこういう現象が起きると聞いたことがあるけど、あれって本当なんだなと、こんな状況でも関わらずそんなのん

きなことを考えてしまった。

（……ここまで、か）

自分はここで死ぬんだなとなぜか冷静に捉えながら、せめてもと笑みを浮かべて――――。

パァン！！

火薬の炸裂音が聞こえたと思うと、『異形』は頭から血が吹き出して僕の体に傷をつけることなく横を通り越していった。
あまりの激痛のためなのか地面をのたうち回る『異形』だが、また「パンパン！」と先ほどの炸裂音が2度響くと、『異形』の頭から肉片と血が飛び散る。そして『異形』は体を痙攣させてパタリと動かなくなった。
突然起きたことに頭が混乱するも、炸裂音の正体が気になり、自分の周囲を見渡して音源を探すと、すぐにその正体は分かった。

切り捨てられた『異形』の近くで苦い顔をして立っている兄貴の左手に収まっている『物』。黒く光るそれは、『拳銃』とよばれる物であった。

なんで、兄貴はあんなものを持ってるんだ……？日本刀の時もそうだったけど、銃なんて明らかに違法なものをどこで手に入れたんだ……？

「……孝、さっさと乗るぞ」

近づいてきた兄貴に言われ、ハッと今の現状を思い出す。長くいすぎたからか、『奴ら』の数がかなり増えてきている。バスの進行方向は数が少ないのが幸いだ。
すぐに立ち上がってバスの入り口まで急いで走る。入り口には倒された『奴ら』が地面を覆っていたので、倒された『奴ら』を踏んで入り口にたどり着く。

「大丈夫か、小室君達」

「すみません先輩たち、迷惑かけてしまって……」

血に染まった木刀を片手に警戒をしていた毒島先輩が安堵の表情で声をかけてくれた。他の皆も怒りを浮かべつつも心配そうな顔でこっちを見ていた。……だめだな、僕。

「ところで、あの女子生徒は？」

タオルをかけた男子生徒と一緒にいたあの子はどうしたのかとたずねると、暗い表情をしながら首を横に振った。脱出を拒否して学園に残ることにしたらしい。それに僕はやるせない気持ちになってしまう。おそらく僕がどう説得したところで、考えを改めてくれるなんてことはないだろう。

（クソッ……！）

後悔や虚しさや怒りがこみ上げてくる。『力』があるのに、肝心なところで役に立てない自分がもどかしい。しかし、時間は僕の気持ちの整理も待ってくれずに進み、『奴ら』は続々と集まってくる。心残りはあるものの、急いでバスの中へと入っていく。最後に兄貴がバスへ入ってドアを閉めたのを確認してからバスの中を見ると、運転席に鞠川先生、前の席に麗、平野、高木、石井がいて、後ろの座席にはいつ乗り込んだのか、紫藤と何人かの生徒が座っていた。その紫藤はどこか胡散臭い笑みを浮かべながら腕を組み、麗は憎悪の視線を向けていた。……やっぱりあの噂って……。

「先生、さっさとバスを！！」

兄貴が鞠川先生にそう言う。鞠川先生は苦しそうな顔をしながら、バスの前に立ちふさがっている『奴ら』を目視する。

「もう人間じゃない……。もう、人間じゃない！！」

自分に言い聞かせるよう叫びながら、バスを発進させる。途中にいる『奴ら』は高速で走るバスに跳ね飛ばされていく。何度も鈍い音を響かせながら進ませていき、ついに校門を抜けた。そのままバスは道路を沿って進んでいく。後ろを振り返れば藤美学園がどんどんと小さくなっていく。

やっと終わったのかと安堵するも、同時に後悔と新たな不安も湧き上がってくる。

———僕ががんばればもっと助けれたんじゃないか。外の世界でどんなことが待ち受けているのか。あの『異形』はなんだったのか。

今までとかけ離れた現実を目の当たりにしてきたことの精神的な疲れがここに来て感じ始めたんだろう。普段以上に重い腰を座席に下ろして、額の汗をぬぐう。
ふと、兄貴を見ると、同じように座席に座って外を眺めていた。腰に日本刀を、右手に木刀を、そして左手に拳銃を持って。ここからでは表情を伺うことはできないけど、いったい何を思ってるんだろうかと気になる。

（……けど、今は少しだけ休もう。こんな状態で問いただしたらどうなるか……）

時間を置いてから話をしようと決めて、さまざまな感情を孕みながら、僕は瞼を下ろした。

第7話（後書き）

やっとイレギュラーさんを出すことが出来ました。自分の稚拙な文章で通じるかどうか分かりませんが、バイオのあいつです。
一応、こいつらがいる理由は考えていますが、真相分かるまでが長いので、気長にお待ちください？

あと、拳銃についてもちゃんと説明します。……犯罪的な理由になりますけど。拳銃の種類はリボルバーみたいなのと思ってください。

それではまた。

第8話（前書き）

今回は外に出たはいいけど、たいしてお話が進まないのである。骨休みみたいなものと考えてください。

あと、この作品中で語られる思考なんかは、学の浅い作者なりに考えてみた戯言ですので、おかしな点が多々ありますからご注意ください。

ではどうぞ。

第8話

学園から出ても『学園黙示録』ってどう思う？学園を舞台にしたお話と思っていたらわずか一巻足らずで学園からおさらばなんだぜ？早すぎにもほどがあるでしょ？
これだったらもっと題名なかったか？なんて考えるが、俺のような凡人ではたいした題名なぞ浮かばない。そう考えるとタイトルを考えるのってすごく大変だよな……。

（……と現実逃避をしてみたが……、しても無意味だな）

はぁっと今までの疲れを吐き出すようにため息をつく。
現在俺たちは、バスに乗って家族の無事を確認するために学園から飛び出して床主市の街を走っている。といってもその目的を持ってるのはあくまで『俺たち』だけだ。
バス全体を確認すると、後ろには『奴ら』から逃げ切れたからか安堵の表情を浮かべる藤美学園の生徒数名と眼鏡教師の紫藤が、前では孝たち『原作』メンバー＋2名が各々の武器の状態を確認している。皆ちらちらと俺を見てるけど。
俺や孝たちはそもそもあの学園を出ることを最優先してたらかいいのだが、確か後ろの奴らは俺の覚えている限りだと学園とかどっかで安全な所を探すべきとかほざくはずなんだよな。……ならなんでバスに乗るんだよと言いたい。
つまり、俺たちとあいつらは意見がまったく違う。なのでこれから対立が起こることを考えると嫌になるし、それを利用して紫藤が『洗脳』を始めることを考えると胃が痛くなる。俺としてはくだらないことで問題起こしてほしくないんだがな。

（……まあ、これだけじゃないんだけどな）

学園を脱出するときに出てきた、『奴ら』とは毛色の違う『異形』。あまりにも不気味なその姿だが、俺はその正体を良く知っている。

（なんで……、『リッカー』が出てくるんだ？ここはバイオ世界じゃないはずだろ？）

――リッカー。『バイオハザード』の世界においてＴ－ウイルスと呼ばれるウィルスによって生み出された化け物の一種で、ゾンビが突然変異を起こした存在である。元が鈍いゾンビとは比較にならないほど運動能力が高く、視覚を失った代わりに聴覚が鋭い。また、天井や壁を這うことができるので突然目の前に現れることもある。

だが、これはあくまで『バイオハザード』の世界での事であり、この『学園黙示録』の世界には存在しないはずである。現にこの世界には『ラクーンシティ』も『製薬企業アンブレラ社』も存在しないのだ。まかり間違ってＴ－ウイルスなどありえるはずはない。はずだと思いたいけど……。

（それに代わるものがあったっておかしくないってことか？それとも俺という転生者（イレギュラー）がいるせいか？……どっちみち今の段階でわかることはない、か）

ゲームなんかだと、話を進めていくうちに事件の関係者に出会って真相を聞かされるなんてことが起こるが、生憎ここは『現実』だ。そういうことが起こるとは考えにくい。

また、リッカーが出てきたということは、もしかすると『ハンター』や『ゾンビ犬』とかも出てくる危険性があるかもしれない。もちろ

んあくまで可能性であると信じたい。
それを思うと、またハァっとため息をついてしまう。

（本当に、俺は面倒ごとに愛されてるな。……あんな場所で銃を使う羽目になったし）

ちらっといまだに左手に握られている拳銃、正式名称『S＆W　M37エアウェイト』と呼ばれる銃に目をやる。
装弾数5発の小型回転式拳銃で、警察なんかでは非常時の護身用なんかにも使用されたりするらしい。『この世界』では警官の標準装備とされている。

どうしてそんなのを持ってるかというと……、中学の頃にヤの字のつく人から奪っちゃいました♪……明るく言うことじゃないな。
なんとういうか、昔ちょっと肩をぶつけたときに因縁もたれて事務所とかそんな場所に連れ込まれたのよ。って、やばそうな雰囲気だったので『気』を全開にして大暴れしたのだ。そのときに事務所に置いてあった拳銃と弾が目に入って、つい奪ってきたってわけよ。
……いやだってさ、曲がりなりにもこの世界の未来を知ってるんだから、どうしても武器が欲しくなるじゃない。そしたらつい盗っちゃったのだ。後から犯罪だとか家族に迷惑がとかでいろいろ悩んだけど。

まあそんな経緯で銃を所持しているわけだが、本来ならこれは転生特典のひとつ『無限弾ツール』なるものを手に入れたから使用するはずだった。だけど孝がリッカーにやられそうになったときに、助けに行こうにも間に合いそうになかったから、銃を使う羽目になったのだ。おかげで貴重な弾を使って残り2発になるしさっきから皆がなんともいえない目でこっちを見てくるのだからたまったもんじゃないよ。

（転生者は厄介事に巻き込まれやすいなんて話は、俺に通用しなくていいのに）

ハァっと3度目のため息をつく。とにかく、銃に関してもちゃんと説明しておかないとな。変な疑惑を持たれるのは嫌にだしな。……よくよく考えると、許可証も持ってないのに日本刀に銃を所持してる俺って凄い危ない人だな。もしこれで『奴ら』が現れなかったら……刑務所直行だったな。……良かったぁ。

「……おい。お前ら何するんだよ？」

あったかもしれない暗い未来を回避したことに安堵していたら、誰かに声をかけられたのでそっちを向くと、髪の毛を金色に染めた不良っぽい男子生徒が苛立った表情で睨んでいた。ただしおびえた目でしきりに銃に視線がいってるあたり、ちょっとびびっているっぽそうだ。

「何って言われてもな。まず名前は？」

「……角田だよ」

「そう、それじゃ角煮くん。今俺たちは家族の安否を確かめるために街に向かってるわけんだが、それがどうした」

言っとくけど角煮は言い間違いじゃないぞ？わざとだぞ？

「てめぇ馬鹿にしてんのか！？てかなんでそれに俺らまで付き合わされるんだよ！？」

……はぁ。話しかけてきたときに予測は出来てたけど……うっとうしいな、これ。

「寮とか学校の中で安全なとこ探せばよかったんじゃないのか！？お前らが勝手に決めたことに付き合わせんな！！」

うわぁ～～。これを大真面目に言ってるのかコイツは？そんなの危険すぎるにもほどがあるだろ？食料の問題とか精神的ストレスとかわかってないのかねコイツは？……こんな馬鹿に分かるわけないか。呆れたことを言う角煮（コイツにはこれで十分）に大して盛大にため息をつくと、角煮は顔を真っ赤にしてなにかを怒鳴ってくるが、知ったこっちゃない。

「そ、そうだよ……。このまま進むより立て篭もったほうがいいよ。学校とかコンビニとかでさ……」

そんな角煮に便乗するように、気の弱そうな男子生徒が意見してくる。

だからそれは問題がありすぎ……コンビニ？そういえばコンビニってこの先にあったっけか？

「鞠川先生」

「どうしたの恭介くん？」

「この先にコンビニってありましたっけ？」

外を眺めていてもコンビニらしきものを見てないからまだ通り過ぎてないんだろうけど……。

「コンビニ？う～～んと、確かそろそろ見えてくるはずだけど……あっほらあそこ！」

そういって指差す先には一見のコンビニが見える。『ＳＥＶＥＮＳＯＮ』なんて名前の、俺の前々世の世界じゃパクリとか言われそうなコンビニがそこにあった。

「でも、あれがどうしたの？」

「これから先、食糧とか水が簡単に手に入るかわかりませんからね。腹が減るとイライラの原因になりますし」

日本人のように基本的に朝昼晩の3食食事できる上に間食までできるようなのって、そうそう長時間の空腹に慣れていないはずだ。睡眠や食事は取らないと頭がうまく働かないしストレスの原因にだってなるって耳にしたことがあるから、ここらで日持ちのする食い物を取っておいたほうがいいだろう。荷物はかさばるけど、これから先まともな食べ物が手に入るどうか怪しいからな。

「分かったわ。それじゃあ駐車場にとめればいいのかしら？」

「ええお願いします。……そういうわけだから高城と石井、手伝ってくれ」

「「何で私（俺）？」」

「高城は今は戦わないんだから荷物持ちぐらい頑張れ。石井もこん時ぐらい役に立て」

「「なんかひどい！？」」

お前らどうしてハモるんだ？ずいぶんと仲がいい事で。
ちょっと石井が羨ましいななんてことを考えていると、バスはゆっくりと駐車場に止まった（途中で何かを轢いていたような気がするが気のせいだろう）。それと同時にドアが開いたので、拳銃をポケットにしまって木刀を構えて外に出て行こうとする。

「おい待てよ！俺を無視するんじゃねえ！！」

なにやら角煮がうるさいが、気にせずにバスを降りてコンビニへと向かう。高城と石井もうるさく言う角煮にうんざりとした視線を送ってからバスを降りる。

「とりあえず、角煮に渡す食い物には便秘解消用のお薬でも入れておこうと密かに誓うのであった」

「「声に出して言うな」」

……あれ？

◇

［ｈｉｓａｓｈｉ］

恭介さんと高城、石井がコンビニに食糧を確保している間に、俺はこれからのことを考えることにした。

今まで恭介さんがいた座席を蹴る金髪の……角田？角煮？とにかくそいつや俺たちのメンバー以外のやつらはどこかで立て篭もることが一番だと考えているらしいけど、それは一番危ういと思う。

さっき恭介さんが言ってたように、食料をどうするかという問題がある。日持ちするものだけそろえたとしても、それがいつまでもあるわけではない。お湯で温めるものは電気やガス、水道が動いているときはまだいいが、これから先動かなくなる可能性だって十分ある。

ほかにもずっと同じ場所にいるというのは精神的につらいものだ。娯楽があるならまだしも、そうでなくただじっとしているのはストレスをためる原因であり、それによって判断能力が失われていって仲間内での対立や暴力が起こりうる。

あと、おそらくだが彼らは立て篭もっていればいつか救助が絶対に来てくれること前提で考えていると思うが、それこそもっとも可能性が低い。全世界で『奴ら』が現れて混乱している状況下において、発電所といった重要な場所を確保するならまだしも、たかが一学園に命を危険にさらしてまでいるかどうかも分からない生存者を探しにくるとは到底思えない。

……だいたい、そんなことを言うならどうしてこのバスに乗り込んだんだと言いたいけどな。

（それに……、紫藤のこともあるしな）

視線をバスの最後部座席に移す。そこには紫藤が眼鏡を掛けなおしながら、胡散臭い笑みを浮かべていた。

こいつは、代議士である父親の秘密資金の出所を麗の父親がその身

辺を捜査していたことに関して、父親に命令されて麗の成績を改竄しやがった。これを知っているのは麗の家族や俺といった一部の人間しか知らない。孝や恭介さんは疑ってはいたが。
そんな男が俺たちと一緒のバスに乗っていることを考えると、頭が痛くなる。麗に言われて気づいたが、紫藤は常にどこか宗教じみた雰囲気を醸し出していた。学校であいつの評判は割といいのだが、その支持者たちの多くはどこか酔いしれた感じで紫藤を慕っていた。

（代議士の息子だから話術や雰囲気作りに長けているんだろうな……。もしあいつが今バスにいる奴らから支持を集めたら……）

それだけは考えたくは無い。そうなれば紫藤を支持する奴らが仮に俺たちを襲うことだってある。いくらこちらが武器を所持しているとはいえ、狭いバス内では満足に使えない。さらに高城や鞠川先生のように戦えない人を人質にされたら……。

「ならさっさと降りろよ」

考え込んでしまったからか、いつの間にか周りの空気が一触即発のものへとなっていた。何事かと視線を動かすと、孝が角煮？と睨みあっていた。……あいつ何やってるんだ！？

「ああ！？なんでてめぇが偉そうにするんだよ！？」

「別に思ったことを言っただけだ。大体、学校で立て篭もりたいならどうしてバスに乗ったんだよ？」

孝がそういうと、角煮？はグッと悔しそうに口を閉ざす。やっぱり、

考えなしに乗ったのか。

「……勝手に乗り込んでおいて、よくもまあ随分な口を利いたもんだな」

そんな角煮？の態度にフンと鼻を鳴らして馬鹿にしたように言う孝。……『奴ら』が現れ始めてから思ってたけど、孝のやつ、ここまで好戦的な奴だったか？確かに普段から俺と一緒に恭介さんと戦ったりはしていたけど、それでも今の孝は攻撃的すぎないか？

「ケッ、よく言うぜ！どうせお前らなんて、あいつがいなきゃ何にも出来ないんだろう！？」

……？何の話だ？

「角煮だったか？何が言いたいんだ？」

「角田だ！　あいつだよ、てめぇにそっくりな男！木刀に日本刀、挙句に銃なんてふざけてもん持ってる奴だよ！！」

「それがいったいどうしったてんだよ？」

「お前ら、あんなの持った奴がいるからでかい顔出来るんだろ！？あいつがいるから偉そうに出来るんだろ！？だから俺たちに指図するんだろ！？」

・・・。馬鹿な奴だと思ってたけど、本当にひどい奴だな。そんなことで偉そうにできるんならとっくにしてるに決まってるだろ？特に恭介さんなんて嬉しそうに飛び跳ねながらやるに決まってる。それでもしなかったのは、こんな状況で一々くだらないことを言い

争わないようにするためだ。だからあの恭介さんだってある程度でしゃばらないでいたんだ。
角煮の一言で、ずっと恭介さんと一緒にいたメンバーからは殺気とも取れるものをこめた視線を角煮に向けていた。小さい頃からずっと一緒だった俺や麗は武器まで構えるほどだ。角煮はそれをじかに受けてひるむも、すぐさま言葉を続けようとと口を開こうとして――。

バンッ！！

何かを叩く音が響く。それと同時にバス全体が揺れ動く。殺気を浴びせていた俺たちやほかの生徒、さらには紫藤までもが音のしたところに視線を向けていた。

「……いい加減にしろよ……」

音の発生源は、孝だった。正確に言えば、『真っ二つに割れた背もたれ』からである。

「えっ……な、なに……？」

突然の理解できない光景に、さっきまでアレほど吠えていた角煮は、打って変わって怯えた表情をしていた。……その気持ちは分からないでもないと俺も思ってしまったが。何せ、素手で背もたれを割ったんだ。驚かないほうがおかしい。俺も昔に恭介さんが同じような光景を見せてくれた時は心底驚いたからな。

「それ以上勝手なことほざいてみろ……、殺すぞ」

バス全体を充満させるかのような殺気を孕みながら、怒りで歪んだ目で睨みつける孝。本当に殺してしまいそうな勢いだ。それに睨まれた角煮は悲鳴を上げて後ろに下がっていく。ほかのみんなも孝の雰囲気に圧倒されて押し黙ってしまっている。

「お～～い、麗ちゃん冴子さん鞠川先生俺だ～、結婚して……て、何、この空気？」

そんな中、場の空気など関係ないとの如くに恭介さんが帰ってきた。その後ろには高城と石井が立っており、その手にはコンビニ袋が提げられていた。

「あんたね……、なんで外からでも険悪な空気が流れてるのがわかってるのに、入っちゃうわけ？」

どうも外からでも中の雰囲気が嫌でもわかっていたらしい。なのに入ってきたのか恭介さん。

「そこはほれ、誰もが愛して止まない恭介お兄さんだからかな？」

「なるほど。さっぱり理解できないわね」

「さすが恭介。バカにもほどがある」

「お前らひどくね？」

バスの入り口のところで漫才をし始めた3人。あまりにも場違いなことをしていると思うのだが、今回はそれのおかげか、バスに漂っていた殺伐とした空気が少しずつ消えていっている。
孝はというと、角煮を一度睨んでから不貞腐れた顔をして座席へと座る。他のみんなもゆっくりとだがあの空気に解放されたことに安堵して盛大に息をついていた。

「……お～い麗ちゃんでも永でもいいから、この状況を説明して。なんでそこの背もたれは真っ二つなの？」

「恭介さん。お願いですから空気を読んでください」

「おいおい永よ、お前は俺が空気読めないつまりＫＹな男と……ハッ！『恭介（『ＫＹ』ＯＳＵＫＥ）』と『空気読めない（『ＫＹ』）』、まさかのところで共通点が！？」

「ホント、一生口閉ざしておいてくれませんか？」

「永ぃ！？」

なんだか、いろんな空気が混じり合ってしまったが、そんなこんなで食料を手に入れた俺たちはバスを発進させて、街へと向かうのであった。

「孝く〜〜ん、なんでそんなに不機嫌なの？お兄ちゃんに相談してみなさいな〜〜」

「別に不機嫌じゃ……って抱きつくな胸を触るな尻撫でるな気持ち悪い！？」

……この人は一度縄で縛って猿轡で黙らせたほうがいいんじゃないだろうか？

第8話（後書き）

恭介お兄さんにスキル『空気読めない』が追加されました♪
実際は、作者がある程度の軽いやり取りをしたかったがためなんですけど。そう、恭介は犠牲になったのだよ！……それはいいとして。

紫藤の活躍（笑）はこれからですので紫藤ファンはこうご期待ください！！……あれが好きな人っているんだろうか？

あと、恭介はホモじゃないからね。最後のはギャグですよ？本当は女の子にしようとしたけど、さすがに直セクハラはまずいかなと思ってやめました。……サービスシーンを期待（？）していた方、申し訳ございません。

では、ここまで読んでいただきありがとうございます。次もお楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5582u/

学園黙示録　転生と気と無限と時々バイオ

2011年8月5日17時53分発行